張伯英『法帖提要』訓注稿(6)

澤田雅弘、賈　川、澤岡雪子、大沢珠弥子、湯淺圭祐
池田絵理香、西原　歩、陳　俊光、鄭　緯、浅野泰之

大学院書道学専攻博士課程前期課程の開設講義「中国書学演習」(澤田担当)のテキストとした張伯英『法帖提要』(筆写原稿。『続修四庫全書総目提要』所収)の内25項目を訓読し注を付したものである。ただし、原稿期日の関係から、本稿には昨年度に入稿しなかった2項目№119・120を含む。原稿は、受講者それぞれが担当項目を整え、注を付したが、訓読については澤田が点検した。執筆者名は、各項末の(　)内に記した。なお、原稿の取りまとめには、池田が当たった。　(澤田)

【№119】

韓烈婦絶命詞[1]一巻　呉県費氏本

清陳冕[2]書。光緒丁未勒石。烈婦呉県費氏。名棣儂。嫁同邑韓経畬[3]。夫死扶柩回蘇。作絶命詩八首。其胞兄徳保[4]。乞陳殿撰冕。書以入石。兪樾[5]為作伝。翁同和。孫家鼐[6]題詩。呉大澂篆一日千秋四字於巻首。徳保作跋。刻者薛念椿[7]也。陳冕。字冠生。光緒時甚有書名。此学翁覃溪体。而筆更肥濁。昔呉譲之評劉東武書[8]。一生不免呉興気味。乃由院体[9]誤之。学書於其従入之途。脱化至難。東武本学松雪。故気味時時流露。謂誤院体則苛論。東武之度越時賢。正以不為院習所囿耳。陳書。純乎摺巻一派。不能立家。得名為状元耳。以之刻石更肥而無骨。翁叔平書。視陳固遠勝。而此則非合作。力撐大架子。外似闊大。中実薄怯。其題張猛龍碑[10]。自言不曽習北碑。是以書乏勁気。所論誠是。非自謙也。兪蔭甫八分書。体格尚雅。骨力則弱。徳保刻此以徴題詠。所獲必多。而未見続刻。有此数家。亦足伝矣。

清の陳冕の書、光緒丁未(光緒33年1907)の勒石。烈婦は呉県の費氏、名は棣儂、同邑の韓経畬に嫁ぐ。夫死して柩を扶して蘇に回り、絶命詩八首を作る。其の胞兄の徳保、陳殿撰冕に乞いて、書せしめて以て石に入る。兪樾為に伝を作り、翁同和(1830～1904)、孫家鼐、詩を題し、呉大澂(1835～1902)「一日千秋」の四字を巻首に篆し、徳保は跋を作る。刻者は薛念椿なり。陳冕は、字は冠生、光緒の時 甚だ書名有り。此れは翁覃溪(方綱 1733～1818)の体を学び、而して筆は更に肥濁す。昔 呉譲之(熙載 1799～1870)、劉東武(墉 1719～1804)の書を評す。「一生 呉興(趙孟頫 1254～1322)の気味を免れず、乃ち院体に由りて之を誤る。」と。学書は其の従りて入るの途に於て、脱化するは至難なり。東武は本 松雪(趙孟頫)を学ぶ、故に気味は時時流露す。院体に誤ると謂うは則ち苛論。東武の度　時賢を越ゆるは、正に院習の囿する所と為らざるを以てなるのみ。陳の書は、摺巻の一派に純らにして、家を立つる能わず。名を得るは状元の為めなるのみ。之を以て刻石は更に肥えて骨無し。翁叔平の書は、陳に視ぶれば固より遠く勝るも、此れは則ち合作に非ず。力は大架子を撐え、外は闊大に似るも、中は実に薄怯たり。其の張猛龍碑に題して、自ら曽て北碑を習わずと言う。是を以て書は勁気に乏し。論ずる所は誠に是にして、自謙するに非ず。兪蔭甫の八分書は体格 尚お雅なるも、骨力は則ち弱し。徳保は此を刻して以て題詠を徴したれば、獲たる所必ず多からんも、而れども未だ続刻を見ず。此の数家有れば、亦た伝うるに足る。

［注］

1　韓烈婦絶命詞：蘇州 西山後埠の費孝子祠にある５つの碑。光緒13年(1887)に、兪樾、翁同和、孫家鼐、呉熙載らが、題した。

2　陳冕：1863～1937。字は冠生、北京の出身。光緒９年(1883)に状元となり、後に翰林院編修に至る。殿撰は状元の意。

3　韓経畬：1826～1907。字は乃穀、号は文田、行一。咸豊６年(1856)の進士。

4　徳保：費徳保(生歿年不詳)。字は芝雲、江蘇省蘇州の人。

5　兪樾：1821～1907。字は蔭甫、自号は曲園居士、浙江省徳清の人、道光30年(1850)の進士。

6　孫家鼐：1827～1909。字は燮臣、号は蟄生、自称は澹清老人。『太伝孫文正公手書遺折稿』を著す。

7　薛念椿：生歿年不詳。江蘇省蘇州の人。1921年に李国楠墓碣、鄒嘉来神道碑、1933年に張棣華妻金簡墓志を刻した。

8　評劉東武書：未検出。

9　院体：斉整をむねとする実務的な書風。清代では館閣体の呼称が一般的。

10　題張猛龍碑：未検出。

（賈　川）

【No.120】

趙臨閣帖十巻

元趙孟頫書。不知何人所刻。刻法搨法均新。為時当不遠也。十巻悉依原帖臨仿。惟欠篆書[1]。自跋云。此帖為希世宝。翻刻雑出。如絳州。臨江。武岡。群玉[2]諸種。無慮百数。非失之瘦。即失之肥。辛亥三月。於汝南周氏公謹処獲観原本。乃知天人之姿。非優孟衣冠所及。愛摹不能釈手。因借帰松雪斎中。臨摹一過。凡五閲寒暑有奇始竣。延祐二年乙卯九月。此書之不似松雪姑無論。跋語謬陋。所挙諸翻本。如武岡群玉。於閣帖有何関渉。愛慕慕字作摹[3]。又云五閲寒暑有奇。直妄語耳。又有徐有貞[4]跋。文鄙書劣。与前跋等。以此等劣刻為松雪。貽誤学人不浅。都市曽見墨迹十冊。亦臨淳化。其書頗似松雪。装潢精美。乃半畝園[5]旧物。雖非真迹。而書勝此遠甚。偽臨此帖者。直於筆法毫無知解。竟有妄人為之刊布。疑此即書人自刻。用欺無目之人。借以牟利。毎冊首行皆分書。冊尾則重摹篆書年月。非驢非馬。荒謬絶倫。尚有宝而蔵之者。可笑甚矣。

元の趙孟頫(1254～1322)の書。何人の刻する所なるやを知らず。刻法搨法は均しく新たなれば、為りし時は当に遠からざるべし。十巻は悉く原帖に依りて臨仿し、惟だ篆書を欠くのみ。自跋に云う、「此の帖は希世の宝為れば、翻刻雑出し、絳州、臨江、武岡、群玉の諸種の如き、無慮　百もて数うるも、之を瘦に失するに非ずんば、即ち之を肥に失す。辛亥(至大４年1311)三月、汝南の周氏公謹(密1232～98)の処に原本を観るを獲。乃ち天人の姿は、優孟の衣冠の及ぶ所に非ざるを知り、愛摹して手を釈く能わず。因りて松雪斎中に借り帰えり、臨摹一過す。凡そ五たび寒暑有奇を閲して始めて竣わる。延祐二年乙卯(1315)九月。」と。此の書の松雪に似ざるは姑く論ずる無し。跋語は謬陋、挙ぐる所の諸翻本の、武岡、群玉の如き、閣帖(淳化閣帖)に於て何の関渉有らん。愛慕の慕の字は摹に作り、又た「五たび寒暑有奇を閲す」と云うは、直だ妄語なるのみ。又た徐有貞の跋有るも、文鄙しく書劣り、前跋と等し。此等の劣刻を以て松雪と為すは、誤を学人に貽ること浅からず。都市に曽て見たる墨迹十冊も、亦た淳化を臨す。其の書は頗る松雪に似て、装潢は精美。乃ち半畝園の旧物なり。真迹に非ずと雖も、而れども書は此に勝ること遠く甚だし。此の帖を偽臨したる者は、直だ筆法に於て毫も知解無し。竟に妄人の之が為めに刊布する有り。疑うらくは此れ即ち書人の自刻か。用て無目の人を欺き、借りて以て利を牟る。毎冊　首行は皆な分書、冊尾は則ち篆書年月を重摹す。驢に非ず馬に非ず、荒謬絶倫なるも、尚お宝として之を

蔵する者有り。笑うべきこと甚だし。

［注］

1　篆書：巻５の戊己帖（蒼頡）、出令帖（夏禹）、延陵帖（孔丘）、歙州帖（史籀）の各帖（いずれも偽）を指す。

2　絳州、臨江、武岡、群玉：『絳帖』（12巻、北宋皇祐から嘉祐の間、潘師旦による淳化閣帖の摹刻）、『戲魚堂帖』（10巻、北宋元祐４年1089、劉次荘による淳化閣帖の摹刻）、『武岡帖』（『清秘蔵』巻下「叙法帖源委」によれば、武岡軍における絳帖の摹刻）、『群玉堂帖』（10巻、南宋の韓侂胄家蔵の晋～趙宋までの真跡を摹刻したもの。原名は閲古堂帖）。

3　愛慕慕字作摹：引用する自跋に見える「愛摹不能釈手」中の愛摹。

4　徐有貞：1407～72。呉県の人。明の宣徳6年の進士、兵部尚書、華蓋殿大学士に至り、武功伯に封ぜられた。能書。

5　半畝園：清末屈指の収蔵家である完顔景賢（1875～1931）の北京にあった邸宅。その収蔵の詳細については、下田章平氏「民国期における完顔景賢の書画碑帖の収蔵について」（「中国近現代文化研究」第11号、2010）など参照。『法帖提要』旧搨米襄陽三帖一巻にも「此半畝園所蔵旧搨。半畝園主人精於鑑賞、所蓄多精品、亦復誤存偽刻、殊可怪詫。」と見える。

（澤田雅弘）

【No.121】

右軍鵞群草書一巻　旧搨本

旧題晋王羲之書。前有右軍画像。題云。晋王羲之書法雄秀。良由天授。朕慕斯人。如見羹墻。故摹其像以為巻引。神霄教主道君[1]御墨。帖尾跋云。羲之此帖字有雲烟巻舒翔動之気。非善双鉤者所能得其妙。精刻者所能形容其一二也。紹興丙辰十月七日臣丙友仁審定。按此書乃黄山谷草書黄庭内景経[2]。作偽者割棄名款。臨右軍像於前。其跋則米友仁題老米臨右軍帖語[3]。去先臣芾臨等字。得者因以為右軍真迹。刻為陽字[4]。加以釈文。未具姓名年月。観其刻法。当在明清之間。有右将軍会稽内史印、双龍印、群玉中秘印[5]。均妄造或仿製者。山谷晩年喜為草書。自謂得長史遺法[6]。此体晋人所無。何謂鵞群草書。此経右軍時尚未出。猶之陜刻心経[7]。目為右軍。心経唐時所訳。右軍何由預書。籤題王右軍鵞群帖[8]。乃陳孚恩[9]筆。円湛似汪退谷（士鋐　1658～1723）。孚恩書家者流。此書山谷面目顕然。乃不之弁。何也。

旧くは晋の王羲之の書と題す。前に右軍の画像有り。題に云う、「晋の王羲之は書法雄秀、良に天授に由る。朕斯の人を慕うこと、羹墻を見るが如し。故に其の像を摹して以て巻引と為す。神霄教主道君御墨。」と。帖尾の跋に云う、「羲之の此の帖は字に雲煙の巻舒翔動の気有り。双鉤を善くする者の能く其の妙を得る所、刻に精しき者の能く其の一二を形容する所に非ざるなり。紹興丙辰（６年　1136）十月七日　臣友仁審定す。」と。按ずるに此の書は乃ち黄山谷の草書の黄庭内景経。作偽者　名款を割棄し、右軍像を前に臨す。其の跋は則ち米友仁の老米の臨右軍帖に題するの語。先臣芾臨等の字を去る。得る者因りて以て右軍の真迹と為し、刻して陽字を為し、加うるに釈文を以てす。未だ姓名年月を具えず。其の刻法を観れば、当に明清の間に在るべし。右将軍会稽内史の印、双龍の印、群玉中秘の印有るも、均しく妄造或いは仿製なる者なり。山谷は晩年喜びて草書を作り、自ら長史の遺法を得と謂う。此の体は晋人に無き所なれば、何ぞ謂わん鵞群の草書と。此の経は右軍の時　尚お未だ出でず。陜刻の心経の、目して右軍と為すに猶之（ひと）し。心経は唐の時の訳する所なれば、右軍何に由りて預め書かん。籤に王右軍鵞群帖と題す。乃ち陳孚恩の筆。円湛なるは汪退谷（士鋐 1658～1722）に似る。孚恩

は書家者の流。此の書　山谷の面目顕然たるに、乃ち之を弁ぜざるは、何ぞや。

［注］

1　神霄教主道君：北宋・徽宗の号。道教の北宋末に興った神霄派を崇めて自ら号した。

2　黄山谷草書黄庭内景経：黄庭堅『山谷集別集』巻13「黄庭経」に「前欲作黄庭草。因査田呂三十六有一軸絹在案上、因一夜草得黄庭、殊有意思。近為王良翰携去。恨公不一見也。」と草書黄庭経を書いたことが見えるが、内景経か外景経かは不明。

3　米友仁題老米臨右軍帖語：米臨右軍帖とは、南宋・曹之格増補『宝晋斎法帖』第9「臨王羲之暴疾等帖」（冒頭の「期小女四歳暴疾」云々を含む七帖で、臨王羲之期小女等七帖とも呼び、『戯鴻堂帖』巻14（明・万暦31年）、『清鑑堂帖』巻7（明・崇禎10年）にも収められる。米友仁題の全文は「羲之七帖、先臣芾中年手臨。此字有雲煙巻舒翔動之気。非善双鉤者所能得其妙、精刻石者所能形容其一二也。紹興丙辰十二月初七日、臣友仁審定。」張伯英所引の偽跋では、この米友仁題中の「先臣芾中年手臨」を除くほかにも、「精刻」の下の石、「十二月」の二、「初七」の七も無い。

4　刻為陽字：張彦生『善本碑帖録』（中華書局）に「晋鵝群帖狂草」を録して、「原伝王右軍書,…見明装拓本,後有唐柳公権及宋高宗刻跋,此帖明、清翻摹刻本伝世很多。又,日本、朝鮮均有摹本,并有陽文木刻本。黄庭堅書大草,類此書体。」という。

5　右将軍会稽内史印、双龍印、群玉中秘印：右将軍会稽内史印は張伯英のいう妄造に係る印記。肖生の双龍印は北宋徽宗の、また群玉中秘印は金章宗の鑑蔵印で、それぞれ張伯英のいう仿製に係る印記。

6　晩年喜為草書。自謂得長史遺法：『山谷題跋』巻7「書草老杜詩後与黄斌老」に「余学草書三十余年、初以周越為師、故二十年抖擻俗気不脱。晩得蘇才翁子美書、観之乃得古人筆意。其後又得張長史・僧懐素・高閑墨迹、乃窺筆法之妙。…。」また『豫章先生遺文』巻11「跋贈元師此君軒誌」に「元師更欲得予手墨、因為作草書。近時士大夫罕得古法。但弄筆左右纏繞、遂号為草書耳。不知与科斗篆隷同法同意。数百年来、惟張長史・永州狂僧懐素及余三人悟此法耳。」

7　陝刻心経：明・李日華『味水軒日記』巻7に「世所伝唐人仿王右軍心経」が見え、西安碑林に心経石刻があるが、陝刻心経が右軍書と目されたとの記事は未検出。

8　王右軍鵞群帖：王羲之が鵝に換えた帖は道徳経とされる（梁・虞龢『論書表』）が、黄庭内景経とするのは陶穀（後晋～宋、903～70）の「山陰道士劉君、以群鵝献右軍、乞書黄庭経、此是也。」（米芾『書史』引）による。なお、『張伯英碑帖論稿』釈文は「群」を脱す。

9　陳孚恩：清・嘉慶7～同治5年（1802～66）、字は子鶴、号は紫藿。江西新城（今の黎川）の人。拔貢出身で道光29年（1849）には刑部尚書を授けられた。書は董其昌を法としたと伝えられる。

（澤田雅弘）

【No.122】

苾芻庵法帖一巻[1]　雲間唐氏本

宋米芾書。無刻石年月。前為苾芻庵法帖行書五字。後為分書雲間唐氏世綸堂摹勒上石。帖則米南宮（芾）所書相論[2]、偽迹也。明清人刻宋三家書多偽本。而米書之偽尤多。三家書各有独至之処。豈庸流所能貌似。況南宮超軼絶塵。深於晋賢之法。不知米之自出。徒作奇形詭状。筆則忽濃忽淡。体則旋大旋小。按之古法無一合。比較真迹無一似。俗濁在骨。令人望而生厭。収蔵家互相驚訝。以為奇迹。従而勒之於石。由是悪札得永冒真迹之名。学者亦従而臨仿。沿譌襲謬。目為此等劣書所障。堕入悪道。一生不識真偽。誤人不浅矣。相論不知誰作。文既猥鄙。米老決不書此。字迹庸劣。去米老不知幾千万里。後有題者云。筆法矯変。風流跌宕。無一筆不傾側。何有於矯

変。無一字不偏軟。何有於跌宕。蔵者装潢精美。珍為明搨佳帖。明搨誠是也。奈帖不佳何。

宋の米芾(1051～1108)の書。刻石の年月無し。前に「苾芻庵法帖」の行書五字を為り、後に分書の「雲間唐氏世綸堂摹勒上石」を為る。帖は則ち米南宮(芾)書する所の相論にして、偽迹なり。明清の人の刻せる宋三家の書は偽本多く、而して米書の偽 尤も多し。三家の書は各おの独至の処有り。豈に庸流の能く貌似する所ならんや。況んや南宮は超軼絶塵、晋賢の法に深し。米の自出を知らず、徒らに奇形詭状を作し、筆は則ち忽ち濃にして忽ち淡、体は則ち旋ち大にして旋ち小。之を古法に按ずるに一合無く、真迹に比較するに一似無し。俗濁 骨に在り、人をして望みて厭を生ぜしむ。収蔵家は互いに相い驚訝して、以て奇迹と為し、従りて之を石に勒す。是れに由り悪札永く真迹の名を冒すを得。学ぶ者は亦た従りて臨仿し、譌に沿い謬を襲い、目 此等の劣書の為に障げられ、悪道に堕入し、一生 真偽を識らず。人を誤ること浅からず。相論は誰の作なるやを知らず。文は既に猥鄙。米老決して此を書せず。字迹は庸劣。米老を去ること幾千万里なるやを知らず。後に題する者有りて云う、「筆法は矯変、風流は跌宕」と。一筆として傾側せざるは無し。矯変に於て何か有らん。一字として偏軟ならざるは無し。跌宕に於て何か有らん。蔵者は装潢精美、珍して明搨の佳帖と為す。明搨は誠に是なり。帖の佳らざるを奈何せん。

[注]

1　苾芻庵法帖一巻：国立国会図書館近代デジタルライブラリーに、模刻の「草書相論帖」(出版者は杉本要蔵、出版年月は明治10年１月)がある。帖首に行書で「苾芻庵法帖」、第２行に「米元章書」、第３行に「相論」とある。本文は第４行以下で、冒頭に「世固有人身瘦而志立体小名高者。云々」とある。本文は草書ではなく、草書を交えた行草書である、落款に「元豊四年(1083)、襄陽米芾。」とあるが、米書とは似るところなく、張伯英の「字迹庸劣。去米老不知幾千万里。」の評のとおりである。

2　米南宮所書相論：注１参照。

(澤田雅弘)

【No.123】

惕無咎斎蔵帖二巻　清江楊氏本

清楊懋恬[1]輯。嘉慶十六年辛未八月刻成。第一巻東坡制草[2]四通。米元章蕪湖学記[3]。祝枝山書古詩。董香光臨古帖。第二巻明楊廷麟[4]自書詩。清楊錫紱書聖主得賢臣頌[5]。制草明袁忠徹[6]蔵。忠徹字静思。柳荘之子也。四草為左僕射范純仁[7]。著作郎范祖禹[8]。吏部郎中范純礼[9]。知衛州王晳[10]。江秋史[11]於乾隆時見此墨迹。已無范純仁詔。疑此帖上巻乃旧刻也。尚有劉錫詔。刻南雪斎帖[12]者。亦於此巻中散出。忠徹蔵印猶在。惜正統三年忠徹作跋。不言制草共若干通也。晩香堂[13]三希堂所刻与此不同。此実坡公偽蹟。忠徹蓋嗜古而暗於鑑別者。楊兼山孤忠大節。載在明史。其遺墨不多見。此書亦黄忠節。倪文貞之匹亞。楊錫[14]紱亦有書名。而体式平近。乾隆時台閣書[15]耳。懋恬錫紱之孫。拠跋尚有東都賦[16]一篇。而此無之。其石有欠佚耶。此帖之刻。重在錫紱。而其書独遜。枝山香光皆精作。南宮蕪湖学記為墨迹抑為重摹石本。弗可考矣。

清の楊懋恬の輯、嘉慶十六年(1811)辛未八月 刻成る。第一巻は東坡の制草四通、米元章の蕪湖学記、祝枝山の書する古詩、董香光の臨する古帖。第二巻は明の楊廷麟の自書詩、清の楊錫紱の書する聖主得賢臣頌、制草は明の袁忠徹の蔵、忠徹は字は静思、柳荘の子なり。四草は左僕射の范純仁、著作郎の范祖禹、吏部郎中の范純礼、知衛州の王晳の為にす。江秋史、乾隆の時に於て、此の墨迹を見るに、已に范純仁の詔無し、疑うらくは此の帖の上巻は乃ち旧刻ならん。尚お劉錫の詔有り。南雪斎帖に刻する者は、亦た此の巻中に於て散出す。忠徹の蔵印

猶お在り、惜むらくは正統三年　忠徹跋を作るも、制草は共に若干通と言わざるなり。晩香堂、三希堂の刻する所は此と同じからず、此れは実に坡公の偽蹟なり。忠徹は蓋し古を嗜むも鑑別に暗き者なり。楊兼山は孤忠大節にして、載せて明史に在り。其の遺墨は、多くは見ず、此の書は亦た黄忠節(道周 1585～1646)、倪文貞(元璐 1593～1644)の匹亞なり。楊錫紱も亦た書名有り、而ども体式は平近にして、乾隆の時の台閣の書なるのみ。懋恬は、錫紱の孫。跋に拠れば尚お東都賦一篇有るも、此には之無し。其の石　欠佚有りや。此の帖の刻は、重は錫紱に在り、而れども其の書独り遜る。枝山(祝允明 1460～1526)、香光(董其昌 1555～1636)皆な精作。南宮の蕪湖学記は墨迹為るや、抑そも重摹の石本為るや、考うべからず。

[注]

1　楊懋恬：？～1826。江西省清江の人、字は雪飄、官は湖北巡撫。

2　制草：詔令の文稿。

3　蕪湖学記：米芾の作。蕪湖県新学記とも呼ばれる。北宋崇寧３年(1104)に張士亨が摹刻。原石は既に佚した。

4　楊廷麟：楊廷麟(？～1646)。字は伯祥、号は兼山。江西省清江の人。崇禎四年(1631)の進士。黄道周、倪元璐とともに三翰林と称される。

5　聖主得賢臣頌：王褒。(生没年不詳)の作。字は子淵。西漢の文学家で、蜀の資中(四川省資陽市)の人。賦に『甘泉』『洞簫』等がある。

6　袁忠徹：1377～1459。字は公達、静思。袁柳荘とも呼ばれ、官は中書舎人に至る。著に『人相大成』『鳳池唫稿』『符台外集』５巻等がある。

7　范純仁：1027～1101。字は堯夫。呉県(江蘇省蘇州)の人。官は観文殿大学士に至り、布衣宰相と称される。著に『範忠宣公集』がある。

8　范祖禹：1041～98。字は淳甫。成都華陽の人。史学家。著に『唐鑑』12巻、『帝学』８巻、『仁宗政典』６巻、『宋史本伝』等がある。

9　范純礼：1041～98。字は彝叟。呉県(江蘇省蘇州)の人。官は尚書右丞に至る。著に『東都事略』『宋史』がある。

10　王晳：生没年不詳。宋代の学者。著に『孫子十家注春秋皇綱論』『孫子兵法注』等がある。

11　江秋史：江徳量(1752～93)。秋史は号。字は成嘉。江蘇儀徴の人。乾隆45年(1780)の探花。監察御史に至る。著に『銭譜』『古泉志』『広雅疏』等がある。

12　南雪斎帖：南雪斎蔵真とも呼ばれる。歴代の叢帖で、晋代から明代まで、70種類ある。清の道光21年(1841)から咸豊２年(1852)にかけて、南海の伍葆恒が撰集し、端渓の郭子光、区遠祥、梁天錫が摹刻した。

13　晩香堂：『晩香堂蘇帖』35巻 巻３所収。明の陳継儒が編集した。

14　楊錫：1524～71。字は徳純、号は鈍庵。嘉靖丁未(1547)の進士で、官は山東巡撫に至る。

15　台閣書：永楽年間(1403～24)に、上級官僚によって用いられた、封建道徳を宣揚する書体で書かれた作。

16　東都賦：班固の賦。『文選』の賦の冒頭にある。『両都賦序』は西都長安と東都洛陽の繁栄を歌い、漢朝を賛美する。

(賈　川)

【No.124】

愛石山房叢帖一巻　江寧楊氏本

清楊文傑蔵石。文傑字偉堂。同治間清兵光復金陵。偉堂収得明人書刻二十余石。又劉石菴書一石。合而蔵之。

全椒薛時雨[1]作跋。汪士鐸[2]為題愛石山房叢帖之籤。作八分書。薛慰農云。甲子大兵復蘇州。余居合肥李相国[3]幕府。於廃寺購得名賢遺墨。自李東陽至万寿祺六十八家。百廿有一紙。首尾完好。商兵宋牧仲[4]撫蘇時所収。旋帰睢州王氏。乾隆癸卯。苕溪沈梅村[5]重価得之。後以番布二百質於武林汪十村[6]。汪寓蘇。故兵燹[7]後猶在蘇。朋輩慫恿刻石。無此重資。偉堂広文[8]於金陵克復得此石。精采煥発。余所蔵明賢遺墨。多広文所蔵数倍。墨守十余年。不能公之同好。対此抱歉。按楊氏所得。除劉石菴一刻外。皆楚南車氏蛍照堂帖[9]残石。余廿余家。薛跋不曽言及。其未見車氏全帖耶。車氏此帖。金陵劉文煥[10]所鐫。疑其刻於南京。未曽運往湖南。故南京兵燹而後致多残失。帰楊氏者。視全帖十之一耳。又見有孫淵如題字者。亦蛍照残刻。或原石散佚。在兵燹以前。偉堂知保存旧刻。亦云賢矣。

清の楊文傑の蔵石。文傑は字は偉堂。同治の間 清兵 金陵を光復し、偉堂 明人書刻二十余石、又た劉石菴(1719～1804)の書一石を収め得て、合せて之を蔵す。全椒の薛時雨 跋を作り、汪士鐸の為に「愛石山房叢帖」の籤を題し、八分書を作す。薛慰農 云う、「甲子(同治３年)大兵 蘇州を復し、余 合肥の李相国の幕府に居り、廃寺に於て名賢の遺墨を購得す。李東陽(1447～1516)自り万寿祺(1603～52)に至る六十八家、百廿有一紙、首尾完好。商兵の宋牧仲 蘇に撫たりし時の収むる所、旋いで睢州の王氏に帰す。乾隆癸卯(48年 1783)、苕溪の沈梅村 重価もて之を得、後に番布二百を以て武林の汪十村に質す。汪 蘇に寓す、故に兵燹の後 猶お蘇に在り。朋輩は石に刻するを慫恿するも、此の重資 無し、偉堂、広文は金陵に於て克復し此の石を得て、精采煥発。余 蔵する所の明賢遺墨は 広文の蔵する所よりも多きこと数倍、墨守すること十余年 之を同好に公にする能わず、此に対して歉を抱く。」と。按ずるに、楊氏の得る所は、劉石菴一刻を除くの外、皆な楚南の車氏の蛍照堂帖の残石。余の廿余家 薛跋 曽て言及せず、其れ未だ車氏の全帖を見ずや。車氏の此の帖は、金陵の劉文煥の鐫する所、疑うらくは其れ南京に刻するか。未だ曽て湖南に運往せず、故に南京　兵燹して後 残失多きを致す。楊氏に帰する者は、全帖に視ぶれば十の一のみ。又た孫淵如(1753～1818)の題字有るを見るは、亦た蛍照の残刻、或いは原石散佚するは兵燹以前に在るか。偉堂 旧刻を保存するを知る、亦た賢と云う。

[注]

1　薛時雨：1818～85。字は慰農、号は澍生。晩年の号は桑根老農。安徽全椒県の人。咸豊３年(1853)の進士。

2　汪士鐸：1802～89。字は梅村、晩年の号は悔翁。江蘇江寧(現在の南京市)の人。歴史、地理学者。

3　李相国：李鴻章(1823～1901)。字は少荃。政治家。『清代士人游幕表』に、「1862年(同治元年)入江蘇巡撫。李鴻章幕。」とある。

4　宋牧仲：1634～1713。名は荦、号は漫堂。晩年の号は西陂老人。河南商丘の人。

5　沈梅村：沈赤然(1745～95)。梅村は号。字は韞山。乾隆三十三年の挙人。浙江仁和の人。

6　汪十村：汪誠(生沒年未詳)。十村は号。字は孔皆。1794年の進士。官刑部の主事。

7　兵燹：太平天国の乱(1851～64)を指す。

8　広文：未詳。

9　楚南車氏蛍照堂帖：『叢帖目　３』蛍照堂明代法書10巻に、康熙32年の刻とある。

10　劉文煥：生沒年未詳。『叢帖目　３』蛍照堂明代法書10巻に、邵陽車萬育の選集、金陵劉文煥の鐫とある。

(澤岡雪子)

【No.125】

鶴寿堂石刻二巻

刻者未具姓名。上巻東坡尺牘廿余通[1]。下巻趙松雪天冠山詩[2]也。坡牘選自西楼帖[3]。即瑛蘭坡[4]所蔵本[5]。蘭坡曽

勒之石。此刻略少。而書法愈覚適厚。凡蘇書真迹。不論摹勒善否。均有奇逸卓犖気概。湧見於字裏行間。非惟蘇書。即其他古賢真迹。亦莫不爾。此刻既未雑有偽書。故雖次序錯誤。任意増減。或字画摹失。而書之光気自不可掩。所選乃西楼帖中精搨不漫漶者。故与真偽淆雑之蘇帖相去不可道里計也。松雪天冠山詩。後有翁覃溪題云[6]。得此真迹後[7]。適於按試広信[8]。携此巻遊此山。始為弁陜刻之誣[9]。名山妙墨。四百年後乃得考正見真。不惟趙書直到山陰也。翁題乃銭梅溪[10]摹。此無翁題。却非陜本。梅溪摹帖往往参以己意。致失真相。此刻深得松雪筆法。与蘇帖可称二妙。勝於銭刻。呉愙斎得宋搨鶴銘[11]。有鶴寿二字[12]。以名其堂。論者以為世間大宝。是帖若出愙斎。必有題識。亦不至如此草草。致多謬誤。殆与愙斎堂名偶同耳。

刻者は未だ姓名を具えず。上巻は東坡(蘇軾 1036～1101)の尺牘廿余通、下巻は趙松雪(孟頫 1254～1322)の天冠山詩なり。坡の牘は西楼帖より選せらる。即ち瑛蘭坡の蔵する所の本。蘭坡曽てこれを石に勒するも、此の刻略ぼ少なし、而れども書法は愈いよ適厚を覚ゆ。凡そ蘇書の真迹は、摹勒の善否を論ぜず、均しく奇逸卓犖の気概有り、字裏の行間に湧見す。惟だに蘇書のみに非ず、即ち其の他の古賢の真迹も、亦た爾らざる莫し。此の刻既に未だ偽書を雑有せず、故に次序錯誤し、任意に増減し、或いは字画摹失すと雖も、書の光気自ら掩うべからず。選する所は乃ち西楼帖中の精搨の漫漶ならざる者なり。故に真偽淆雑の蘇帖と相い去ること道里もて計るべからざるなり。松雪の天冠山詩の後 翁覃溪(方綱 1733～1818)の題有りて云う、「此の真迹を得る後、適たま広信に按試するに於て、此の巻を携えて此の山に遊び、始めて陜刻の誣を弁ずるを為す。名山の妙墨、四百年の後乃ち考正して真を見るを得、惟だに趙書直ちに山陰に到るのみならざるなり。」と。翁の題は乃ち銭梅溪の摹。此れには翁の題無く、却て陜本に非ず。梅溪の摹帖は往往にして参うるに己の意を以てし、真相を失うを致す。此の刻は深く松雪の筆法を得て、蘇帖と二妙と称すべし、銭刻よりも勝る。呉愙斎(大澂1835～1902)は宋搨の鶴銘を得、「鶴寿」の二字有り、以て其の堂を名づく。論ずる者は以て世間の大宝と為す。是の帖 若し愙斎より出づれば、必ず題識有り、亦た此の如く草草にして、謬誤多きを致すに至らず。殆ど愙斎の堂名と偶たま同じくするのみ。

[注]

1　東坡尺牘廿余通：道光30年(1850)瑛棨の選集である「西楼帖」によるもの。『叢帖目　3』東坡蘇公帖3巻参照。

2　趙松雪天冠山詩：詩は祝玄衍の作。しかし「鶴寿堂石刻」がよったものは不明。

3　西楼帖：蘇軾の専帖。1168年、汪応辰(南宋 生歿年不詳)の輯。四川省成都の西楼下で刻成された為、この名があり、「成都西楼帖」「西楼蘇帖」「東坡蘇公帖」ともいう。もと30巻であるが、全巻は伝わっていない。

4　瑛蘭坡：瑛棨(？～1878)。初名は瑛桂。清 道光期の人。収蔵家。

5　瑛蘭坡所蔵本：書道学論集7『法帖提要』№21瑛蘭坡摹蘇帖4巻　に「清瑛棨得宋搨成都蘇帖三巻。重勒之石増題跋一巻。共四巻。」とある。

6　有翁覃溪題云：翁方綱「跋趙文敏書天冠山題詠巻」所載。文字に異同あり。嘉慶14年(1809)翁方綱77才の跋。

7　得此真迹後：梁章鉅『退庵所蔵金石書画跋尾』重刻天冠山詩帖真本には、「趙松雪旧題天冠山詩真迹巻。翁覃溪師督学江右時始得于南昌。」とある。

8　適於按試広信：翁方綱「跋趙文敏書天冠山題詠巻」に「乾隆戊申(1788)適得此真迹因於按試広信」とある。広信は江西省広信府。

9　陜刻之誣：陜刻は西安碑林の刻。誣は偽りの意。梁章鉅『退庵所蔵金石書画跋尾』趙文敏自書詩巻の項に「近所伝天冠山詩刻、在陜中者、筆筆側削、気味軽佻、乃是偽迹。」とある。

10　銭梅渓：銭泳(1759～1844)。字は立群、梅渓は号。江蘇省無錫の人。摹勒鐫刻をよくし、多くの集帖 専帖を刻成した。

12　呉窓斎得宋搨鶴銘：鶴銘は瘞鶴銘。

13　有鶴寿二字：瘞鶴銘 冒頭「鶴寿不知其紀也」の２字。

（大沢珠弥子）

【No.126】

斎谷米董帖二巻　長宝道署本

清恵年[1]輯刻。一米南宮虹県詩[2]。一董香光裴将軍詩[3]。皆大書。米書光緒三年董書光緒六年勒成。均有恵年題記。虹県詩云。此詩那文毅公[4]刻石蘭州節署。予於咸豊壬子。手搨蔵之書笥。忽廿有六年。近聞原石已損。爰倩善化章伯和[5]重刻。置之長宝道署。裴将軍詩云。余既刻虹県帖。忽検得董文敏臨裴将軍詩。亦那文毅所刻精本。倩徐蘅衫魏半塘[6]二君合力重摹上石。連米帖及各跋。共得三十頁。並嵌廊壁。同時又有葛天民跋。二刻皆極精。那彦成論香光書亦有精当語。略謂大家書一落筆円。通幅皆円。一落筆方。到底皆方。観此新[7]方筆力。迅於風雨。頗亦不無所解。顔書裴将軍詩。見忠義堂帖。体頗狂怪。香光所臨不襲其貌。与汲古堂小字本異曲同工、皆晩年古淡之作。而此尤極雄偉。那恵二賢。能知其書之妙。自是具有識力。米書元好問跋[8]。乃遺山書迹之僅存者。帖尾二印。一為斎谷赫舎里氏。一為菱舫。恵年書跋。亦頗清雅。雖非那繹堂之比。勝葛天民[9]遠矣。

清の恵年の輯刻。一は米南宮(芾 1051～1107)の虹県詩、一は董香光(其昌 1555～1636)の裴将軍詩、皆な大書なり。米書は光緒三年(1877)、董書は光緒六年(1880)の勒成。均しく恵年の題記有り。虹県詩に云う、「此の詩 那文毅公 石に蘭州節署に刻す。予 咸豊壬子(２年1852)に、手搨し之を書笥に蔵し、忽ち廿有六年。近ごろ原石已に損すと聞き、爰に善化の章伯和を倩いて重刻せしめ、之を長宝道署に置く。」と。裴将軍詩に云う、「余 既に虹県帖を刻し、忽ち董文敏臨裴将軍詩を検得す。亦た那文毅の刻する所の精本。徐蘅衫、魏半塘の二君を倩いて力を合わせて重摹し上石せしむ。米帖及び各跋を連ね、共に三十頁を得、並べて廊壁に嵌む。同時に又た葛天民の跋有り。二刻は皆な極めて精。那彦成は香光の書を論じ、亦た精当の語有り。略ぼ謂へらく大家の書は一に落筆　円にして、通幅皆な円。一に落筆　方にして、到底皆な方。此の(新)方の筆力を観るに、風雨より迅く、頗る亦た解する所無くんばあらず。顔書の裴将軍詩は忠義堂帖に見ゆ。体は頗る狂怪。香光の臨する所は其の貌を襲わず。汲古堂の小字本と異曲同工にして、皆な晩年の古淡の作なり。而れども此れは尤も雄偉を極む。」と。那、恵の二賢は、能く其の書の妙を知る。自ずから是れ具に識力有り。米書の元好問の跋は、乃ち遺山の書迹の僅かに存する者なり。帖尾の二印は、一は斎谷赫舎里氏と為し、一は菱舫と為す。恵年の書跋は、亦た頗る清雅。那繹堂の比に非ずと雖も、葛天民に勝ること遠し。

［注］

1　恵年：満洲正藍旗の人。号は菱舫。浙江塩運使。画は山水、人物、花草、虫魚に巧である。

2　虹県詩：虹県(安徽省泗県)に遊歴したおりの旧作七言詩一首と、再遊しての七言詩二首。署名はないが、崇寧５年(1106)前後、米芾、最晩年の作とみられる。

3　裴将軍詩：伝顔真卿の書。『忠義堂帖』(『顔魯公帖』)の中に刻入されている。

4　那文毅公：那彦成(1764～1833)。姓は章桂。字は韶九、東甫。号は繹堂。文毅は謚。満洲正白旗の人。乾隆54年(1789)の進士。

5　章伯和：章寿彛(生没年不詳)。伯和は字。湖南善化の人。

6　徐蘅衫、魏半塘：未詳

7　新：稿本不明瞭。『張伯英碑帖論稿』の翻刻では「新」。ただし文意不明。あるいは斬か折か。

8　元好問：1190～1257。本名不詳。字は祐之。号は遺山。

9　葛天民：生没年不詳。字は小巣。刻印の名家であり、画もよくした。

（湯淺圭祐）

【No.127】

南宮詩帖二巻　明搨本

宋米芾書。上巻名花詩[1]。下巻木蘭詩[2]。刻搨均旧。宋賢書南宮最多。麻牋十万。散布人間。宜其真迹随在可見。然自明以来。彙刻単行諸種。幻怪百出。不可究詰。足使閲者目眩。甚矣識真者之少也。名花詩款云紹興乙卯渓堂米黻[3]。米名改黻為芾。在元祐間。乙卯為紹興五年。上溯元祐逾四十年。南宮之没久矣。此如三希堂[4]山谷第一帖。計其年歳。山谷没已二年[5]。二者之可笑相同。木蘭詩有岳忠武[6]跋[7]云。米南宮書。縦横排宕。天真煥発。此巻於嫵媚中兼含厳粛。非臨池功深者不能究也。忠武書世伝甚多。直無一真[8]。此詩作忠武跋。則米迹之偽。不問可知。名花詩之字体。与快雪堂之丹青引[9]相似。或為一手贋造。明人潑墨斎帖[10]収之[11]。木蘭詩則王亶望清芬閣米帖[12]。亦経収入[13]。偽妄如此二種。尚有珍為南宮佳書。於其年歳之錯誤。漫不加察。自明迄今。蔵米帖者視為宝玩。吁可異矣。

宋の米芾(1051～1108)の書、上巻は名花詩、下巻は木蘭詩、刻搨は均しく旧し。宋賢の書は南宮 最も多く、麻牋十万、人間に散布す。宜なるかな其の真迹の随在 見るべきこと。然るに明より以来、彙刻単行の諸種、幻怪百出し、究詰すべからず、閲者をして目 眩ましむるに足る。甚しきかな、真を識る者の少なき。名花詩の款に云う「紹興乙卯(5年 1135)渓堂米黻」と。米の名「黻」を改め「芾」と為すは元祐(1086～1094)の間に在り。乙卯は紹興五年 為れば、元祐に上溯すること四十年を逾え、南宮の没すること久し。此れ三希堂の山谷(黄庭堅 1045～1105)第一帖の、其の年歳を計うれば、山谷 没して已に二年の如し。二者の笑うべきこと相い同じ。木蘭詩に岳忠武の跋有りて云う、「米南宮の書は縦横排宕し、天真煥発す。此の巻は嫵媚中に於て兼ねて厳粛を含む。臨池の功深き者に非ずんば究む能わざるなり。」と。忠武の書は世伝 甚だ多く、直だ一真 無し。此の詩は忠武の跋を作りたれば、則ち米迹の偽は問わずして知るべし。名花詩の字体は快雪堂の丹青引と相い似て、或いは一手の贋造と為す。明人の潑墨斎帖 之を収む。木蘭詩は則ち王亶望の清芬閣米帖 亦た経(かつ)て収入す。偽妄の此の如き二種すら、尚お珍して南宮の佳書と為す有り、其の年歳の錯誤に於て、漫りに察を加えず、明より今に迄るまで、米帖を蔵する者は視て宝玩と為す、吁　異なるべし。

[注]

1　名花詩：No.207仁聚堂法書8巻、『説帖』(『続修四庫提要』第18巻293頁)潑墨斎法書10巻にもみえる。注11参照。

2　木蘭詩：No.309敬一堂法帖32巻に「米元章木蘭詩。……四種無一真。」とあるほか、『説帖』(同278頁)白雲居米帖12巻にもみえる。注7参照。

3　渓堂米黻：蜀素帖の落款に酷似する。おそらく蜀素帖を利用して書かれたものであろう。

4　三希堂：三希堂石渠宝笈法帖。集帖。梁詩正、蔣溥、汪由敦、嵇璜 等による奉勅編。

5　山谷第一帖計其年歳山谷没已二年：三希堂帖の山谷第1帖は洛陽雨霽七古である。落款には「大観丁亥(1107)春正月灯節後三日。為雲菴道人題。庭堅。」とあり、黄庭堅の没後2年が経過した年月が記されている。『叢帖目　1』三希堂石渠宝笈法帖32巻に「大観丁亥。三谷没二年矣。此書悪濁。与米海岳虎丘詩一手贋物。蘇黄二家之第一帖同為偽書。不知梁汪諸賢当日如何審定。乖謬至此。」とあるほか、張伯英『帖平』三希

堂帖に「洛陽雨霽詩無一筆不偏軟繚繞。与世所伝米元［章］虎丘詩一手偽作。山谷豈有此俗筆。此帖於蘇黄二家書皆以偽蹟冠首。大不可解。」とあり、『説帖』（同244頁）御刻三希堂石渠宝笈法帖32巻に、「蘇黄二家皆取偽書冠首」とある。また、『説帖』（同271頁）玉虹鑑真帖24巻に、「……黄書洛陽雨霽風塵息一詩。皆偽書。」とある。

6　岳忠武：岳飛（1103～42）。字は鵬挙。相州湯陰の人。武将。著作を集めたものに『岳忠武王文集』がある。

7　岳忠武跋：『白雲居米帖』所収の木蘭詩には、「米南宮書。縦横排宕。天真煥発。而此巻于嫵媚中兼含厳粛。非臨池功深者不能究也。紹興六年（1136）歳次丙辰中秋前三日。岳飛題。」とあり、文字に若干の異同がある。『説帖』（同278頁）白雲居米帖12巻に「木蘭詩後有岳忠武跋。尤偽本之可笑者。」とある。

8　忠武書世伝甚多直無一真：『法帖提要』№15岳忠武書古詩１巻に「忠武之為人。固不必以書重。且亦未必工書。好事者因重其人。思得其遺墨。於是偽本層出不窮。凡収得者莫不刻石。如出師二表。再刻三刻。果於忠武何渉。」とある。

9　快雪堂之丹青引：『叢帖目　1』快雪堂法書５巻参照。『説帖』（同253頁）快雪堂法書５巻に「……米書丹青引皆贋跡。」とある。

10　潑墨斎帖：集帖。王秉錞（生歿年不詳）編、章徳懋 鐫。刻成年不詳。漢～元の書170種を刻入する。すべて『淳化閣帖』ほかの集帖からの翻刻である。『叢帖目　1』潑墨斎法書10巻参照。

11　潑墨斎帖収之：『説帖』（同293頁）潑墨斎法書10巻に「九巻中米書名花詩。不知従何而得。跋云花詩止照張彦遠所載。近玉照堂有偽増者。悉刪去之。彦遠唐人。何能採及米書。此書之偽顕然。」とある。

12　清芬閣米帖：米芾の専帖。王亶望（生歿年不詳）撰輯。清 乾隆39年（1774）刻成。原石は北京 故宮博物院にある。米芾の書166種を刻入する。『法帖提要』№153清芬閣米帖18巻の中に、丹青引を含む偽跡32帖が挙げられている。

13　木蘭詩則王亶望清芬閣米帖亦経収入：『叢帖目　3』清芬閣米帖18巻には、木蘭詩についての記述はない。

（池田絵理香）

【№128】

香光集帖四巻　銅山崔氏本

明董其昌書。一文賦[1]。二桃花賦[2]。三成楽軒記。四陳太常誌。各為一巻。後有崔銘箴跋云。惺三[3]姪倩工小楷書。吾郷自万年少先生[4]後無其倫匹。近帰自都門。以所獲董書四帖為贈。鐫搨精美。皆不易得之品。文賦与玉煙堂本[5]相同。而別為一刻。出玉煙之上。成楽軒記其石在翰林院。非外人所能搨取。初印者尤可宝。陳太常誌。前後損欠。是海寧陳氏[6]刻。冊首南竹公以上失去。旧題南竹公誌。南竹是太常之祖。原題誤也。惟桃花賦不詳何本。亦明刻明搨。惺三因予嗜董書。割愛以贈。可感也。銘箴字叔蘭。銅山諸生。惺三名学淵。銅山挙人。皆徐人工書者。此帖題語。非深於董書者。不能原原本本如是。惟桃花賦乃延清堂帖[7]之一種。延清者陳懿卜[8]所鐫四董帖[9]之一。懿卜重摹董蔵太清楼帖[10]。故名其刻曰延清。伝本頗少。故叔蘭不曽見耳。太常誌雖残欠。而書在数種之上。成楽軒記石已泐甚。此乾隆廿七年梁詩正[11]初刻成時墨本。不損一字。文賦猶香光少作。不若桃花賦之古雋。惺三喜蓄書帖。今二家所蔵弆。未審猶能保存否耳。

明の董其昌（1555～1636）の書、一は文賦、二は桃花賦、三は成楽軒記、四は陳太常誌、各おの一巻を為す。後に崔銘箴の跋有りて云う。「惺三姪倩 小楷の書に工、吾が郷は万年少先生より後　其の倫匹無し。近ごろ都門より帰り、獲る所の董書四帖を以て贈るを為す。鐫搨精美にして、皆な得易からざるの品。文賦は玉煙堂本と相同じ。而れども別けて一刻を為し、玉煙の上に出づ。成楽軒記は其の石 翰林院に在り。外人の能く搨取する所に非ざれば、初印は尤も宝とすべし。陳太常誌は、前後損欠す。是れ海寧の陳氏の刻なり。冊首は「南竹公」以上

失去す。旧くは南竹公誌と題す。南竹は是れ太常の祖、原題は誤りなり。惟だ桃花賦は何れの本なるかを詳らかにせざるも、亦た明刻明搨なり。惺三 予の董書を嗜むに因りて、割愛し以て贈る。感ずべきなり。」と。銘箴は字は叔蘭、銅山の諸生。惺三は名は学淵、銅山の挙人。皆な徐人の書に工なる者。此の帖の題語は董書に深き者に非ざれば原原本本なる能はざること是の如し。惟だ桃花賦は乃ち延清堂帖の一種、延清は陳懿卜の鐫する所の四董帖の一。懿卜は董の蔵する太清楼帖を重摹す、故に其の刻を名づけて延清と曰う、伝本は頗る少なし。故に叔蘭は曽て見ざるのみ。太常誌は残欠すと雖も、而れども書は数種の上に在り。成楽軒記の石は已に泐すること甚だし、此れは乾隆廿七年(1762)梁詩正の初めて刻成する時の墨本なれば、一字をも損なわず。文賦は猶お香光の少き作なれば、桃花賦の古雋に若かず。惺三は喜びて書帖を蓄う、今二家の蔵弆する所、未だ猶お能く保存するや否やを審らかにせざるのみ。

[注]

1　文賦：『叢帖目 3』玉煙堂董帖4巻の巻3、及び鷦鷯館帖4巻の巻3に「文賦並跋」とある。また、梁章鉅の『金石書画跋尾』巻第8の董文敏行書文賦冊に「董思翁行書文賦冊。款署癸丑正午前一日。是五十九歳所作。故虚霊円潤絶不似晩年書。」とある。

2　桃花賦：『叢帖目 3』延清堂帖巻1に「董其昌桃花賦並跋」とある。

3　惺三：王学淵(1861～1928)。惺三は字。号は雷渓。銅山県の人。

4　万年少先生：万寿祺(1603～1652)。年少は字。号は万道人。江蘇省徐州の人。愛墨家として名があり、著に『印説』『論墨』などがある。

5　玉煙堂本：4巻、董其昌の専帖。陳瓛の編、呉朗の刻。董其昌の書20種を董の生存中の崇禎3年(1630)に刻成したもの。董書の専帖中もっとも早くに成った。

6　海寧陳氏：陳瓛(生没年不詳)。字は季常、号は元瑞。浙江省海寧の人。『海寧渤海陳氏著録』がある。

7　延清堂帖：6巻、董其昌の専帖。36種を収載する。陳鉅昌の摹勒。明 天啓4年(1624)刻成。

8　陳懿卜：陳鉅昌(生没年不詳)。懿卜は字。江蘇省蘇州の人。董其昌の縁戚。

9　四董帖：鷦鷯館帖、紅綬軒法帖、延清堂帖、剣合斎帖の4帖。

10　太清楼帖：10巻、集帖。『大観帖』『大観太清楼帖』ともいう。原石は靖康の変(1126)で損壊したため、原石拓完本の伝存なし。翻刻本は数種あり。

11　梁詩正：1697～1783。字は養仲、号は薌林。浙江省杭州の人で、梁同書の父。

(西原　歩)

【No.129】御臨舞鶴賦一巻 清内府本

清高宗書。内府所刻。無年月。鮑明遠[1]舞鶴賦[2]。董香光喜書之。世伝大小数本。而内府所収大字。本尤為超逸古澹。晩年年合作。高宗臨此。神致酷肖。非精墨佳筆不能作。首尾数百言。一気呵成。賦云衆変繁姿。参差洊密。煙交霧凝。風去雨還者。此書似之。清代帝王書。高宗為最。雖与仁廟同臨董書。而仁廟体格稍弱。尚覚拘於形相。不及此書之神清骨秀。妙超自然。其勒石之書甚多。然亦無能勝此者。近人評書。於高宗或有微辞。謂僅以円熟見長。非知書者。似此詣力深邃。不横使気力。却無糸毫滞相犯其筆端。生平所作。何減米元章之麻牋十万。否者安能造此境地。即張天瓶[3]学董。称為冠絶一時。然其大書猶嫌用力太過。不及此書自然高秀。但自運[4]者未能尽如是耳。前佚数頁。後有体元主人万幾余暇[5]二印。附成邸[6]孟東野詩。亦大書。則又非天瓶之比。意在合欧趙両家。而結字未免空闊。於此見大書之不易工。高宗学力之未易幾及也。

清の高宗(乾隆帝 1711～99)の書。内府の刻する所。年月無し。鮑明遠の舞鶴賦は、董香光(其昌 1555～1636)喜

んで之を書く。世に大小数本を伝う。而して内府所収の大字本は尤も超逸古淡にして、晩年の合作と為す。高宗 此を臨し、神致酷だ肖る。精墨佳筆に非ずんば作る能わず。首尾 数百言 一気呵成す。賦に「衆変繁姿、参差して洊密、煙は交わり霧は凝り、風は去り雨は還る。」と云うは、此の書　之に似る。清代の帝王の書は高宗を最と為す。仁廟(康熙帝 1654～1722)と同じく董書を臨すと雖も、而れども仁廟は体格稍や弱く、尚お形相に拘わるを覚ゆ。此の書の神清骨秀、妙超自然なるに及ばず。其の勒石の書甚だ多し。然れども亦た能く此に勝る者無し。近人　書を評すれば、高宗に於て或いは微辞有り。僅かに円熟を以て長を見すと謂うは、書を知る者に非ず。此の詣力深邃にして、横しまに気力を使わず。却て糸毫も滞りて其の筆端を相犯す無きに似る。生平作る所何ぞ米元章の麻牋十万に減ぜん。否ざる者は安んぞ能く此の境地に造(いた)らん。即ち張天瓶は董を学びて、称して一時に冠絶すと為す、然れども其の大書は猶お用力太だ過ぐるを嫌い、此の書の自然高秀なるに及ばず。但だ自運は未だ尽くは是の如くなる能わざるのみ。前に数頁を佚し、後に体元主人、万幾余暇の二印有り。成邸の孟東野(郊751～814)の詩を附す。亦た大書。則ち又た天瓶の比に非ず。意は欧(陽詢 557～641)、趙(孟頫 1254～1322)両家を合するに在るも、結字は未だ空闊なるを免れず。此に於て大書の工みにし易からず、高宗の学力の未だ幾及し易からざるを見る。

[注]

1　鮑明遠：鮑照(415～70)。明遠は字。東海(江蘇省漣水県)の人である。

2　舞鶴賦：鮑明遠の作。古賦と駢賦の間にある。『文選』巻14にある。

3　張天瓶：張照(1691～1745)。字は得天。天瓶は号。諡は文敏。江蘇省松江の人。康熙48年(1709)の進士で、累進して刑部尚書に至った。帖学の大家。著に『天瓶斎書画題跋』がある。『石渠宝笈』の編纂にもかかわった。

4　自運：書においては、臨書に対して手本を見ずに書くことをさす。例えば、王澍『論書賸語』に「自運の際には故人の書法に従い、臨古の際には自分の運筆がなくてはならない」という。

5　体元主人、万幾余暇：ともに康熙帝の用印。

6　成邸：成親王(1752～1823)。乾隆帝の子。姓は愛新覚羅、名は永瑆。

(陳　俊光)

【No.130】

声山杜律一巻　陽邑曹氏本

清査昇[1]書。道光壬辰曹汝光刻。題云。予既刻声山先生楷書。復獲此本。態濃意遠。生気逼人。因復勒石。声山於康熙丙戌秋扈蹕塞北。直廬清暇。偶閲杜集書此。仁廟嗜習董書。一時翰苑中無不臨董。声山其傑出者。行書体勢尤似香光。此冊若不具名。鮮不以為香光真迹者。郭尚先[2]跋云。査声山先生学思翁書可謂形神俱肖。能事似在呉楚侯[3]上也。惟思翁書随手之変。不名一体。晩年以平原収因結果。古淡生硬。最為奇作。声山専就其中年書円暢者求之。正如参禅人専在臨済[4]下尋祖師西来意[5]。固是正法眼蔵[6]。然未必一超便至仏地耳。蘭石之評査書。可謂適当。顧蘭石自書。亦為院体所困。学書之事。言易而行難。評前人之作。往往極有見地。及其自運。則難於超妙。以郭氏此跋。与査書相較。未免瞠乎其後。去思翁則更遠。汝光字子謙。所刻声山小楷。未之見也。

清の査昇の書、道光壬辰(12年1832)の曹汝光の刻。題に云う、「予既に声山先生の楷書を刻す。復た此の本を獲。態は濃く意は遠く、生気は人に逼る、因りて復た石に勒す。」と。声山は康熙丙戌(45年1706)の秋に於て塞北に扈蹕し、直廬の清暇、偶たま杜集(杜工部集)を閲して此を書す。仁廟(康熙帝 1654～1722)は董(其昌 1555～1636)の書を嗜習したれば、一時　翰苑中 董を臨せざるは無し。声山は其の傑出したる者なり。行書の体勢は

尤も香光(董其昌)に似たり。此の冊若し名を具えずんば、以て香光の真迹と為さざる者鮮し。郭尚先跋して云う、「査声山先生 思翁(董其昌)の書を学びて形神倶に肖ると謂うべし。能事は呉楚侯の上に在るに似る。惟だ思翁の書は手に随うの変あり、一体を名せられず。晩年　平原(顔真卿 709～85)を以て因を収めて果を結び、古淡生硬にして、最も奇作為り。声山は専ら其の中年の書の円暢なる者に就きて之れを求む。正に参禅の人の専ら臨済の下に在りて、祖師西来の意を尋ぬるが如し。固より是れ正法眼蔵なり。然れども未だ必ずしも一たび超えて便ち仏地に至らざるのみ。」と。蘭石の査書を評するは適当と謂うべし。顧うに蘭石の自書も亦た院体の困する所と為る。学書の事は言うは易く行うは難し。前人の作を評しては往往にして極めて見地有るも、其の自運に及べば則ち超妙に難し。郭氏の此の跋を以て、査書と相い較ぶれば、未だ其の後に瞠するを免れず、思翁を去ること則ち更に遠し。汝光は、字は子謙、刻する所の声山小楷は未だ之を見ざるなり。

[注]

1　査昇：1650～1707。字は仲韋、号は声山。浙江海寧の人。康熙27年(1688)の進士で、官は翰林院侍読学士に至った。著に『澹遠堂集』がある。

2　郭尚先：1785～1832。字は元開、号は蘭石。福建莆田の人。嘉慶14年(1809)の進士で、翰林院編修から大理寺卿に至った。著に『芳堅館題跋』がある。

3　呉楚侯：呉易(生没年不詳)。楚侯は字。原名は翹。董其昌の代筆家の一人。

4　臨済：臨済宗。中国禅宗五家(臨済、潙仰、曹洞、雲門、法眼)の一つ。

5　祖師西来意：祖師西来。禅宗で、祖師達磨が西方のインドから中国に来り、法を伝えたこと。祖師西来意(祖師西来の意義目的を問うこと)は禅の公案として用いられる。『趙州録』に「時に僧有り問う、如何なるか是れ祖師西来の意。師云く、庭前の柏樹子。」とある。

6　正法眼蔵：仏教用語。肝心要の事柄の意。

(鄭　緯)

【No.131】

王虚舟醴泉銘一巻　附黄自元臨本

清王澍[1]書。款云。光緒紀元丁亥孟秋吉黔崇正堂於任城軍次摹勒上石。崇正堂不詳何人。当是同光間軍将之駐済寧者。虚舟臨此在雍正七年。系銜云司封司諫史官良常王澍臨於九竜山斎。字大於欧書約四倍。乃虚舟最精之作。包慎伯評書。謂王澍枯直無血[2]。梁聞山則謂其不解執筆之法[3]。此書枯直。誠所不免。其体格勻称。自非功力深邃。亦不易到。附光緒間善化黄自元[4]臨本。其書大小略同原碑。転折軽重失度。頓成俗状。遠在虚舟以下。黄書一時風行。習応試体者多宗之。芒角森然。徒足取悦庸目。銘文絶後承前。承字已泐。一切覆本及重剜本[5]皆作光前。虚舟敬輿両臨本皆徒之。未詳考耳。香光嘗書此銘。不襲其形貌。而自有荘俊之度。惜不曽見全者。若此両本。一枯直。一做作。降而愈下。於率更直没交渉。虚舟書有随園印記。是袁簡斎[6]所蔵墨迹。合装者為作梅。未著姓。題云。率更此碑不易学。学者可徒二家問津。夫学書徒此入手。沿襲謬陋。将終身不能窺見古人。黄書刻本。尚有周自庵寿[7]序。平正少圭角。略勝此書。然去率更遠矣。

清の王澍の書、款に云う「光緒紀元丁亥孟秋　古黔の崇正堂 任城の軍次に於て摹勒して上石す」と。崇正堂は何人なるやを詳かにせず。当に是れ同(治)、光(緒)間の軍将の済寧に駐する者なるべし。虚舟此を臨するは雍正七年(1729)に在り。系銜に云う「司封司諫史官　良常の王樹　九竜山斎に臨す。」と。字は欧書より大なること約四倍、乃ち虚舟の最精の作なり。包慎伯(世臣 1775～1855)書を評して、「王澍は枯直にして血無し」と謂い、梁聞山(巘 1710～85頃)は則ち「其れ執筆の法を解せず」と謂う。此の書の枯直なるは、誠に免れざる所なるも、

其の体格は匀称、功力深邃に非ざるよりは、亦た到り易からず。光緒間の善化の黄自元の臨本を附す。其の書の大小は略ぼ原碑に同じ、転折軽重 度を失い、頓かに俗状を成し、遠く虚舟以下に在り。黄書は一時風行し、応試の体を習う者は多く此を宗とす。芒角森然として、徒だ庸目を悦ばすを取るに足るのみ。銘文の「絶後承前」の「承」字は已に泐し、一切の覆本及び重剞本は皆な「光前」に作る。虚舟、敬輿の両臨本　皆な之に徒うは、未だ詳考せざるのみ。香光(董其昌 1555～1636)嘗て此の銘を書して、其の形貌を襲わず、而して自ら荘俊の度有るも、惜しむらくは曽て全き者を見ず。此の両本の若きは、一は枯直、一は倣作、降りて愈いよ下り、率更(欧陽詢 557～641)に於て直ちに交渉 没し。虚舟の書に「随園」の印記 有り、是れ袁簡斎 蔵する所の墨迹なり。合装する者は作梅と為すも、未だ姓を著さず。題に云う、「率更の此の碑は学び易からず、学ぶ者は二家より問津すべし。」と。夫れ学書は此より入手すれば、謬陋を沿襲し、将て終身 古人を窺見する能わず。黄書の刻本に、尚お周自庵の寿序有り。平正 圭角少なく、略ぼ此の書に勝る、然れども率更を去ること遠し。

[注]

1　王澍：(1668～1739)清朝前期の書家、学者。江蘇省金壇の人。字は若霖、号は虚舟、竹雲。康熙51年(1712)の進士。官は吏部員外郎となった。『虚舟題跋』『竹雲題跋』『淳化秘閣法帖考正』などの著がある。

2　包慎伯評書謂王澍枯直無血：『芸舟双楫』述書(中)に、「近人王澍謂江南足拓。書乃下品。枯直無血。不如河北断碑。亦為有見地者。」とある。

3　梁聞山謂其不解執筆之法：『承晋斎積聞録』に「王若霖澍書学欧。未得執筆法。匾嫩不円勁。」とある。

4　黄自元：1837～1918。字は敬輿、号は澹叟。湖南省安化県竜塘郷の人。清の同治戊辰七年(1868)に榜眼となり、翰林院編修を授かる。『間架結構九十二法』を著す。

5　重剞本：仲威の『中国碑帖鑑別図典』493頁 乾嘉以後拓本の条に「光」字の拓を掲げる。また、『増補校碑随筆』に、「乾嘉後拓本、十九行「絶後□前」之「□」字、誤剞成「光」字。」とある。

6　袁簡斎：袁枚(1716～97)。字は子才、簡斎は号。清中期の文学家。浙江省銭塘の人。乾隆4年(1739)の進士。趙翼、蔣士銓と共に乾隆三大家と呼ばれる。詩論では性霊説を主張した。

7　周自庵：周寿昌(1814～84)。字は応甫、自庵は号。清末の詩人。湖南省長沙の人。道光25年(1845)の進士。官は内閣学士、礼部侍郎に至った。詩 書 画ともに優れている。『思益堂集』がある。

(賈　川)

【No.132】

西渓爵墓詩[1]一巻　杭県汪氏本

清梁同書書。乾隆己亥刻成。先是丙申二月。程烈[2]至西渓。展其師汪積山[3]墓。賦二律。汪縄祖[4]。金甡[5]。梁同書和之。戊戌二月。金甡往拝積山墓。又賦二律。汪双成[6]和之。共詩十二首。梁山舟書以上石。附山舟手簡一通[7]。皆行書。程烈。字既培。与山舟同年。而山舟則積山之婿。亦其門人也。書刻精美。山舟小行書。在其各体書之上。近人評書。有謂其俗薄者[8]。俗薄由於無筆。山舟筆力堅勁。有唐宋人遺法。同時劉石庵。王夢楼之外。罕与為敵。以為俗薄。不知書人之妄論也。双承[9]為積山之子。承祖[10]其従孫。詩筆皆清雅。汪氏多才士。能以文学世其家。得山舟書。遂為世珍。所附一簡。即与汪承祖者。前有印云。浙東寿氏桐華庵珎蔵書画記[11]。江浙既人文淵藪。而乾嘉間又有清文物極盛之時。此冊刻工搨工皆精美。非晩近所能及。初刻成時墨本。尤妍妙也。

清の梁同書(1723～1815)の書、乾隆己亥(44年 1779)に刻 成る。是れに先んずる丙申(1776)二月、程烈 西渓に至り、其の師汪積山の墓に展して二律を賦し、汪縄祖、金甡、梁同書 之に和す。戊戌(1778)二月、金甡往きて積山の墓を拝み、又た二律を賦し、汪双成 之に和す。共に詩十二首。梁山舟(同書)書して以て上石し、山舟の手

簡一通を附す。皆な行書なり。程烈は、字は既培、山舟と同年、而して山舟は則ち積山の婿、亦た其の門人なり。書刻は精美。山舟の小行書は、其の各体書の上に在り。近人の評書に其の俗薄を謂う者有り。俗薄は筆無きに由るも、山舟は筆力堅勁、唐宋人の遺法有り。同時の劉石庵(墉 1719～1804)、王夢楼(文治 1730～1804)の外与に敵と為るもの罕なり。以て俗薄と為すは、書を知らざる人の妄論なり。双承は積山の子と為す。承祖は其の従孫。詩筆は皆な清雅なり。汪氏 才士多し、能く文学を以て其の家を世よにし、山舟の書を得て遂に世珍と為す。附する所の一簡は、即ち汪承祖に与うる者なり。前に印有りて云う、「浙東寿氏桐華庵珎蔵書画記」と。江浙は既に人文の淵藪、而して乾(隆)嘉(慶)の間は又た有清の文物極盛の時なり。此の冊は刻工搨工は皆な精美、晩近の能く及ぶ所に非ず。初めて刻成する時の墨本は、尤も妍妙なり。

[注]

1　西渓酹墓詩：梁同書『頻羅庵遺集』巻2に「同年程観水自新安来杭。展謁積山先生墓。感賦二律。余嘗執経外舅之門。是日不得偕往。惘然有作。即次其韻。」の詩を収録する。

2　程烈：？～1773。浙江省仁和の人。知県であった程蔭桂の子。小金川の反乱において、父と共に殺された。

3　汪積山：汪惟憲(1681～1742)。字は子宜。積山は又たの字。号は水蓮居士。浙江省仁和の人。雍正7年(1729)に抜貢生となり、書も工であった。『遵聞斎録』『積山詩文集』6巻がある。また、『皇清書史』巻18「善本書室蔵書志」には「書法清挺蒼秀。梁学士同書其婿也。」とある。

4　汪縄祖：生歿年不詳。字は亢宗、号は秋御。浙江省仁和の人。袁枚(1716～97)の友。『松石間吟稿』がある。

5　金甡：1702～82。浙江省仁和の人。字は雨叔。号は海住。国子監学正、侍講学士、礼部侍郎等を歴任。『静廉斎詩集』24巻がある。

6　汪双成：汪惟憲の一族と考えられるが、未詳。『清代伝記叢刊』等に伝記資料を見ない。

7　山舟手簡一通：不詳。

8　近人評書有謂其俗薄者：俗薄の近人評は未検出。

9　双承：汪双成の誤りか。

10　承祖：生歿年不詳。山東省済南の人。

11　浙東寿氏桐華庵珎蔵書画記：不詳。

(大沢珠弥子)

【No.133】

来青山館蔵翰二巻　霊石王氏本

清王夢鵬[1]書。其子中極輯刻。乾隆壬寅勒成。夢鵬字六翮。号竹林。霊石諸生。乾隆四十六年。特旌孝義。入郷賢祠。其書以臨古帖為多。上巻荘通敏[2]。張灼[3]。裴謙。祁韻士[4]並中極題跋。下巻曹秀先[5]。劉躍雲[6]。張塤[7]。周厚轅[8]。張炌。顧宗泰[9]。張模[10]。祝徳全[11]。何思鈞[12]題跋。皆盛称其人品。書亦端謹有法度。惟所臨帖有東坡西湖詩。此詩坡公贋迹。庸俗不可名状。而竹林乃不之識。学古宜別真偽。日取偽帖摹擬。縦能肖似。於古人渺不相渉。竹林功力頗深。結字尚不同院体[13]。其学晋帖。不解草書筆法。純用行体。臨宋人則較善。時代近也。伏処郷里。罕見古書。又無鑑別真偽之識。是以所造未能高遠。評者謂可追蹤玉局。如銅柯鉄幹。過情之誉。良不足憑。僅可与中牟倉氏之式好堂手沢[14]相伯仲耳。

清の王夢鵬の書、其の子の中極の輯刻。乾隆壬寅(47年1782)の勒成。夢鵬は字は六翮、号は竹林。霊石の諸生。乾隆四十六年(1781)特に孝義を旌せられ、郷賢祠に入る。其の書は古帖を臨するを以て多と為す。上巻は荘通敏、張灼、裴謙、祁韻士 並びに中極の題跋。下巻は曹秀先、劉躍雲、張塤、周厚轅、張炌、顧宗泰、張模、祝

徳全、何思鈞の題跋。皆な盛んに其の人品を称し、書も亦た端謹にして法度有り。惟だ臨する所の帖に東坡(蘇軾 1036～1101)の西湖詩有り。此の詩は坡公の贋迹、庸俗なること名状すべからず。而れども竹林は乃ち之を識らず。古を学ぶには宜しく真偽を別つべし。日に偽帖を取りて摹擬す。縦え能く肖似すれども、古人に於て渺として相い渉らず。竹林 功力頗る深ければ、結字 尚お院体に同じからず。其の晋帖を学ぶは、草書の筆法を解せず、純ら行体を用う。宋人を臨するは則ち較や善し。時代近ければなり。伏して郷里に処り、古書を見ること罕なり。又た真偽を鑑別するの識無し。是を以て造る所 未だ高遠なる能わず。評者「玉局(蘇軾)を追蹤すべし。銅柯鉄幹の如し。」と謂うは、過情の誉にして良に憑るに足らず。僅かに中牟倉氏の式好堂の手沢と相い伯仲すべきのみ。

[注]

1　王夢鵬：未検。

2　荘通敏：生歿年不詳。武進の人。

3　張灼：生歿年不詳。安粛の人。字は未克。

4　祁韻士：1751～1815。寿陽の人。字は鶴皋、号は諧亭。乾隆42年(1777)の進士。『皇朝藩部要略』『新疆事略』『西域釈地』等がある。

5　曹秀先：1708～84。江西省新建の人。字は冰持。芝田。号は地山、恒所。諡は文格。乾隆元年(1736)の進士で、礼部尚書に至った。『賜書堂集』がある。

6　劉躍雲：1736～1808。江蘇省武進の人。字は服先、号は青垣。乾隆31年(1766)の進士。劉綸の子。礼部侍郎、江西年試主考官、会試副主考、内閣学士等を歴任。

7　張塤：生歿年不詳。呉県(江蘇省蘇州)の人。字は商言、号は瘦銅。乾隆30年(1765)の挙人、内閣中書となる。翁方綱、趙翼、孔継涵らとの親交があった。『張氏吉金貞石録』5巻がある。

8　周厚轅：生歿年不詳。湖口の人。字は馭遠。乾隆36年(1771)の進士。

9　顧宗泰：生歿年不詳。また名は景泰。元和の人。字は景岳、号は星橋。乾隆40年(1775)の進士。『月満楼集』がある。

10　張模：生歿年不詳。浙江省平湖の人。字は東巖、号は霊谿。篆刻、蘭竹を善くした。

11　祝徳全：生歿年不詳。呉橋の人。字は葆初。

12　何思鈞：生歿年不詳。霊石の人。字は季甄。

13　院体：清では皇帝御用体としての性格が強まり、道光以降は烏(黒々と)、方(正しく)、光(滑らかに)を訣とする肥厚庸俗の書に傾いた。『中国文化史大事典』(大修館書店) 参照。

14　中牟倉氏之式好堂手沢：清の倉景恬の刻に係る、その父兆彬と伯父兆麟の書。『法帖提要』No.116式好堂手沢4巻 中牟倉氏本 参照。

(湯淺圭祐)

【No.134】

蘇古儕離騒経一巻　碧江蘇氏本

清蘇珥[1]書。珥字古儕[2]。書離騒全文。其後人曰虚谷[3]者。取以上石。題跋廿余家。呉栄光[4]。龍元任[5]。何清輝[6]。梁藹如[7]四家。与離騒同刻。刻者端州区遠祥[8]。其余各家所跋。則同治四年続刻。刻者西樵何睿明[9]也。古儕書頗清挺。而去古人甚遠。題者或云出入鍾王。得晋人神髄。可謂過情之誉。非古儕所克当也。王之斌[10]云頡頏坡老。李錦源[11]則云直駕東坡而上。題書者応其後人之請。不得不賛美。顧著語当有分寸。此書何能比東坡。李跋以頡頏坡老之言為未足。謂駕其上。妄語用以勒石。不慮為観者笑乎。又有以東坡及米元章所書離騒相比者。東坡所書楚

辞。惟見九弁一刻[12]。不聞有離騒[13]。米書清芬閣有之。乃偽迹也[14]。馮誉驥[15]跋称里後学十齢童子。馮於十歳書小楷已能工整。自是難得。郭尚先[16]云。[17]曽見停雲館書此経[18]。意欲追蹤中令。而多率処。風力尚在此下。不必栄古而虐今。此与其他妄賛者自不同也。

清の蘇珥の書、珥は字は古儕。離騒の全文を書す。其の後人の虚谷と曰う者 取りて以て上石す。題跋は廿余家、呉栄光、龍元任、何清輝、梁藹如の四家は、離騒と同刻なり。刻者は端州の区遠祥。其の余の各家の跋する所は則ち同治四年(1865)に続刻す。刻者は西樵の何睿明なり。古儕の書は頗る清挺なるも、古人を去ること甚だ遠し。題する者 或いは鍾王に出入し、晋人の神髄を得と云うは、過情の誉と謂うべし、古儕の克く当る所に非ざるなり。王之斌は「坡老に頡頏す」と云い、李錦源は則ち「直ちに東坡を駕ぎて上る」と云う。題書者 其の後人の請に応ずれば、讃美せざるを得ず、顧うに著語 当に分寸有るべし。此の書 何ぞ能く東坡に比べん。李跋は坡老に頡頏するの言を以て未だ足らずと為し、其の上を駕ぐと謂う。妄りに語りて用いて以て勒石し、観る者に笑わるるを慮らずや。又た東坡 及び米元章 書する所の離騒を以て相い比ぶる者有り。東坡の書する所の楚辞は惟だ九弁の一刻を見るのみ、離騒有るを聞かず。米書は清芬閣に之有るも、乃ち偽迹なり。馮誉驥の跋は「里の後学十齢童子」と称す。馮 十歳に於て小楷を書し已に工整を能くするは、自ずから是れ得難し。郭尚先云う、「曽て停雲館の此の経を書するを見るに、意は中令(褚遂良 596〜68)を追蹤せんと欲するも、率処多し。風力 尚お此の下に在り、必ずしも古を栄とせず今を虐げず。」と。此れ其の他の妄賛者と自ずから同じからざるなり。

[注]

1　蘇珥：1699〜1767。広東省順徳の人。康有為『広芸舟双楫』巻6に、同郷の書家として名を挙げている。

2　珥字古儕：『清代室名別称字号索引』には字は瑞一、号は古儕とある。『儒林集伝録存』『書林藻鑑』『清史稿列伝』『清史列伝』『碑伝集』には字は瑞一とある。『文献徴存録』『国朝耆献類徴初編』に字は端一とあるのは、誤記か。

3　虚谷：不詳。

4　呉栄光：1773〜1843。字は殿垣、伯栄。号は荷屋、石屋山人。広東省南海の人。嘉慶4年(1799)の進士。阮元の門下であり、収蔵家として名高い。著に『筠清館法帖』『辛丑銷夏記』『歴代名人年譜』がある。

5　龍元任：生歿年不詳。字は仰衡。号は莘田。嘉慶22年(1817)の進士。広東省順徳の人。

6　何清輝：不詳。

7　梁藹如：『国朝詩人徴略』『清代画史補編』『国朝書人輯略』『書林藻鑑』には、字は遠文、号は青崖とあるが、『清代室名別称字号索引』には、字は青崖、号は遠文、無怠懈斎とある。嘉慶19年(1814)の進士。広東省順徳の人。

8　区遠祥：『石刻刻工研究』未収。

9　何睿明：『石刻刻工研究』未収。

10　王之斌：生歿年不詳。字は粋珊。号は松谷、拙翁、知退軒、松谷拙翁。道光9年(1829)の進士。湖北省黄陂の人。

11　李錦源：不詳。

12　東坡所書楚辞惟見九弁一刻：『説帖』(『続修四庫提要』第18巻289頁)景蘇園帖6巻に「九歌九弁二種皆坡公在黄州所書。九弁刻於鬱岡斎。九歌曽為天瓶居士所蔵。未見其他刻本。然筆勢頗多偏側。与九弁不類。疑贋製。」とある。『叢帖目 4』鬱岡斎墨妙10巻参照。

13　不聞有離騒：郁逢慶『郁氏書画題跋記』蘇東坡書離騒九弁巻 及び、汪砢玉『珊瑚網』蘇子瞻書離騒九弁巻に、「作字如古槎怪石。如怒龍噴浪。奇鬼搏人。書家不可及也。郭畀拝観於霊済寺。」とあるほか、卞永誉『式

古堂書画彙考』坡翁書離騒九歌巻にも記載あり。

14　米書清芬閣有之乃偽迹也：『叢帖目　3』清芬閣米帖18巻参照。『法帖提要』№153清芬閣米帖18巻に「然其中偽蹟甚多。……離騒経。計偽者三十二帖。」とある。

15　馮誉驥：1822～84。字は仲良、卓如。号は展雲、得人、鈍翁、崧湖。広東省高要の人。『明清進士題名碑録索引』には道光24年(1844)の進士とあるが、『清代画史補編』には道光21年(1841)の進士とある。

16　郭尚先：1785～1832。字は元聞、蘭石。号は拙叟、増黙庵。福建省莆田の人。嘉慶14年(1809)の進士。鑑別に精しく、著に『芳堅館題跋』がある。

17　郭尚先云：『郭題遺稿八巻』及び『芳堅館題跋』未収。

18　停雲館書此経：文徴明の墨跡。離騒と九歌を小楷で書いたもの。文徴明83歳の作である。

（池田絵理香）

【№135】

夢楼楷帖二巻　揚州本

清王文治書。一昭月塔銘[1]。一陜州二十一詠[2]。昭月[3]沛県余氏。揚州高旻寺[4]僧。名了貞。乾隆五十三年戊申十月書。晋安馮鼎高[5]為陜州知州。用昌黎三堂韻[6]作二十一詩。夢楼謂其清遠澄澹。有王裴風[7]。書鐫於石。乾隆五十五年庚戌八月。皆劉御李次山父子[8]所摹刻也。塔銘款云。近事男[9]王文治撰書。是夢楼為昭月弟子。夢楼深於禅学。論書毎参以禅理。題米帖[10]云。治嘗謂右軍為如来禅[11]。唐人為菩薩禅[12]。宋人為宗門禅[13]。米公其宗門之六祖[14]乎。六祖外示椎魯。掃尽義学[15]。惟於正与磨[16]時。痛下椎箚[17]。接引最上根人[18]。根器稍鈍。無不顧而却走。而一花五葉[19]。宗風因之大振。其如来第一龍象[20]乎。米書奇険瓌怪。晋之風韻。唐之規矩。至是均無用。而一往清空霊逸之気、与右軍相印於毘廬性海中[21]。以塗毒鼓[22]。作醍醐漿[23]。用貪嗔痴[24]。為菩提種[25]。非具大慧根人。何能領受。以禅喩書発自香光。夢楼演之。大暢玄旨。何蝯叟極賞此論[26]。二書皆其合作。超逸処多。沈著稍遜。蓋由天資優於学力也。

清の王文治(1730～1802)の書。一は昭月塔銘、一は陜州二十一詠。昭月は沛県の余氏、揚州の高旻寺の僧、名は了貞。乾隆五十三年(1788)戊申十月の書。晋安の馮鼎高　陜州知州為るとき、昌黎(韓愈)の三堂韻を用いて二十一詩を作る。夢楼(王文治)謂う「其れ清遠澄澹、王裴の風有り。」と。書の石に鐫せらるるは、乾隆五十五年(1790)庚戌八月。皆な劉御李、次山父子の摹刻する所なり。塔銘の款に云う。「近事男　王文治の撰書」と。是れ夢楼は昭月の弟子と為す。夢楼は禅学に深く、書を論ずるとき毎に参うるに禅理を以てす。米帖に題して云う、「治嘗て謂う右軍は如来禅と為す。唐人は菩薩禅と為す。宋人は宗門禅と為す。米公は其れ宗門の六祖か。六祖は外　椎魯を示し、義学を掃尽す。惟だ正に与磨の時に於て痛きところに椎箚を下し、最上の根の人に接引するも、根器の稍や鈍なるもの、顧みて却て走らざるは無し。而して一花五葉。宗風　之に因りて大いに振う。其れ如来の第一の龍象か。米書は奇険瓌怪にして、晋の風韻、唐の規矩、是に至りて均しく用いる無きも、而れども一往の清空霊逸の気は、右軍と毘廬の性海の中に相印す。塗毒鼓を以て、醍醐の漿と作し、貪嗔痴を用て、菩提の種と為す。大慧の根を具うる人に非ずんば、何ぞ能く領受せん。」と。禅を以て書を喩うるは香光より発し、夢楼之を演じ、大いに玄旨を暢ぶ。何蝯叟(紹基)極めて此の論を賞す。二書は皆な其の合作にして、超逸の処多し。沈著稍や遜るは、蓋し天資の学力に優るに由るなり。

［注］

1　昭月塔銘：不詳。昭月は注３参照。

2　陜州二十一詠：不詳。陜州は今の河南省三門峡市。注６参照。

3　昭月：1729～85。伝記資料に達珍『正源略集』巻16「高旻昭月貞禅士」、彭紹升『一行居集』巻6「揚州高旻寺昭月禅師伝」がある。前者に「年二十、受具于宏済律師。…謁高旻了凡聖(高旻寺主席。乾隆21年歿)…豁然開悟、従茲日益玄奥。後継席焉。…師主席三十余年。…乾隆五十年十月七日示寂。世寿五十七、僧臘四十七(三十七の誤か)。塔于江城村之原。」後者に「年二十、投皇蔵峪弘済律師、受具足戒。…歴三年…頓明深旨。尋往揚州高旻寺。…年五十七。僧臘三十有七。」とあるとおり、悟りを得て以降生涯高旻寺に在り、乾隆20年頃、了凡を継いで30余年主席に任にあった。

4　揚州高旻寺：隋代に創建され揚州邗江区西南にある古刹。康熙帝は南巡の際に「高旻寺」の書額を賜い、「高旻寺碑记」を著した。

5　馮鼎高：『陝県志』巻14に「乾隆四十八年(1783)任」、また鄭祖庚『侯官県郷土志』者旧録外編に「馮鼎高、字彝仲、長楽籍。…三十六年調知永定、…累遷河南鄭州知州、尋移知陝州。…擢知江南松江府、権按察使、移知蘇州府。…性好崇奨文学、在永定則修竜州書院、在長沙則修岳麓書院、在鄭州則修管城書院、在陝州則葺召南书院。故其所至，文風蒸蒸日上。…鼎高注意興学、可謂握教育行政之体要矣。以疾卒于蘇、年五十八。」とある。

6　昌黎三堂韻：『韓昌黎(愈)詩集』巻9「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」(五言絶句)

7　其清遠澄澹有王裴風：『王夢楼詩集』に見えない。王・裴は、西晋時代に風流を対比された河東の裴氏と琅琊の王氏。

8　劉御李次山父子：劉御李は法帖提要『職思堂帖』『海愚詩録』『朔五十三参像記』の各項にも見える。劉次山は『石刻刻工録』№6320に嘉慶三年(1797)「汪梅墅生壙銘石刻」の摹鐫者として見える。

9　近事男：居士、すなわち家に在って五戒を受けた男子。唐の玄奘『大唐西域記』摩揭陀国(下)に「鄔婆索迦、唐は近事男と言う」とある。

10　題米帖：王文治『快雨堂題跋』巻4「清芬閣米帖」を指す。なお『快雨堂題跋』との間に以下の異同がある。宗門禅は「宗家禅」に、米公は「米公者」に、惟於正与磨時痛下椎箚は「唯於正与麽時痛加錐箚」に、無不顧而却走は「未有不望而却走者」に、宗風は「家風」に、米書奇険瓌怪は「米書奇険瓌怪、任意縦横後」に、均無用は「皆無所用之」に作るが、趣旨に変りはない。

11　如来禅：如来すなわち悟りを開いた修行完成者の禅法。『楞伽経』に「云何(いかん)なるが、如来禅なる。如来地に入りて、聖智の相を自覚し、三種の楽に住し、衆生、不思議の事を弁ずることを成す。是を名づけて、如来禅となす。」とある。

12　菩薩禅：菩薩すなわち如来を目指す修行者の禅法。

13　宗門禅：宗門すなわち俗人のままで剃髪し仏門に入った者の禅法。

14　宗門之六祖：恵能(638～713)。法号は慧能とも表記されるが慧は訛誤の説がある。禅宗の第六祖。俗姓は盧氏、唐代の嶺南新州(広東省新興県)の人。曹渓宝林寺(広東省韶関の南華寺)において禅宗を広め、頓悟を主張し華南の諸宗派に影響を与え、南宗と呼ばれた。

15　外示椎魯、掃尽義学：椎魯は鈍愚、義学は煩瑣な章句の学。すなわち、鈍愚をさらけだし章句の学を排除したの意。

16　正与磨則：正にそもなれば則ち。与磨は宋代禅宗の俗語「与麽生」を踏まえるので、本来、磨は麽。与麽は這麽。恵能『六祖壇経』自序品に「不思善、不思悪、正与麽時、那箇是上座本来面目。」等の例がある。

17　痛下椎箚：『五灯会元』巻11に「示衆。我有時先照後用、有時先用後照。有時照用同時、有時照用不同時。先照後用、有人在。先用後照、有法在。照用同時、駆耕夫之牛、奪飢人之食、敲骨取髄、痛下針錐。照用不同時、有問有答、立賓立主、合水和泥。」と見える「痛下針錐」に同じ。

18　接引最上根人：六祖嘗言：「此是最上乗法，為大智上根人説。(此れは是れ最上の乗法なれば、大智上根の人

の為に説く。)」(鄧文寛・栄新江輯校『敦博本禅籍録校』所収『六祖恵能大師於韶州大凡寺施法壇経』)と見える。根は能力、心、気質。後出の「根器」も同義。「吾戒定慧、勧上根上智人。(吾が戒定慧は、上根上智人に勧む)」「随根器而説法。(根器に随いて説法す)」(いずれも『伝灯録』)などと用いる。

19　一花五葉：『景徳伝灯録』菩薩達磨に見える。一輪の花が五枚の花弁を開く意。のち五葉は敷衍して曹同・臨済・雲門・潙仰・法眼の五派を指すようにもなった。

20　龍象：高僧の譬え。

21　毘盧性海：毘盧は毘盧遮那仏(大乗仏教の仏の一。宇宙の真理を全ての人に照らし、悟りに導く仏)の略。性海は仏性を深く広い海に譬えた語。

22　塗毒鼓：毒を塗った鼓。『涅槃経』に説く、仏性常住の声はよく衆生の五逆十悪を殺害し、仏道に入らしむるの譬えに用いられる。『涅槃経』巻9に「譬如有人以雑毒薬用塗太鼓、於大衆中撃之発声。雖無心欲聞、聞之皆死。唯除一人不横田死者。是大乗大般涅槃経亦復如是。在在処処諸行衆中有聞声者、所有貪欲瞋恚愚癡悉滅尽。其中雖有無心思念、是大涅槃経因縁力故、能滅煩悩、結自滅。(譬えば人有りて、雑毒薬を以て用て太鼓に塗り、大衆の中に於て之れを撃ちて声を発せしむるが如し。心に聞かんと欲すること無しと雖も、之を聞けば皆な死す。唯だ一人横死せざる者を除く。是の大乗典大涅槃経も亦た復た是の如し、在在処処の諸行の衆中、声を聞く者有れば、所有の貪欲・瞋恚・愚痴は、悉く皆な滅尽す。其の中　思念に無心なる有りと雖も、是の大涅槃経因縁力の故に、能く煩悩を滅して、結自ずから滅す。)」とある。

23　醍醐漿：ここでは結惑を断つ毒の意。すなわち『法華玄義』十に「醍醐殺人者、如涅槃経中、鈍根声聞、開発慧眼、得見仏性。(醍醐の人を殺すは、涅槃経中の、鈍根・声聞の、慧眼を開発して、仏性を見るを得るが如し。)」とある。

24　貪嗔痴：三者はそれぞれ五毒心(貪・嗔・痴・慢・疑)の一。また三毒(貪・嗔・痴)の一。

25　菩提種：清・方濬頤『二知軒詩續鈔』巻13「口占」詩に、「其葉可療飢、我聞田父説。慈悲閔赤子、是為菩薩種。」と飢餓を救う田父野叟の智恵と対照する用例などから、菩提樹の種子は菩提心(悟りを開き仏道を行おうする心)であろう。

26　何蝯叟極賞此論：未検

(澤田雅弘)

【No.136】

何太史易林四巻　慈利朱氏本

清何紹基隷書。光緒四年朱際斅勒石。際斅号半崖。能作篆隷書。得何子貞咸豊十年所書易林。勒為四巻。楊翰[1]。鄒湘倜[2]。郭崑燾[3]。均有題跋。楊息柯云。子貞太史晩年尤勤隷課。所蔵張公方衡興祖二碑。各臨数百編。故能深契程蔡遺法。神与古会。此書可作両漢古刻観。郭意城[4]曰。子貞丈以書名天下。用功専勤。舟車不廃。往見所臨張遷碑。尚不免枯槎架険怪石当路[5]之病。此易林疏逸古茂。宜与程蔡通譬欵。予謂貞丈書八分第一。八分又以此為第一。郭楊二家所評傾服至矣。息柯学蝯叟書。行楷幾無区別。惟稍弱耳。書家論書重在得筆。得筆則篆隷真草。一以貫之。否者任作何体。無有是処。此説甚当。書之用筆也。如行路然。得其運用之法。由此前進。不至誤入歧途。不得筆者。致力雖深。終在門外。蝯叟書之超越。固由致力精専。非筆之運用適宜。則亦未能至此。近学蝯叟者多矣。徒得其屈曲之状。而軟若無骨。蓋不解筆法。僅求形似。任習何家書。均無一当。豈惟学蝯叟然哉。

清の何紹基の隷書。光緒四年(1878年)朱際斅 勒石す。際斅 号は半崖、能く篆隷書を作る。何子貞の咸豊十年(1860)に書する所の易林を得、勒して四巻と為す。楊翰、鄒湘倜、郭崑燾は均しく題跋有り、楊息柯 云う、「子貞太史 晩年尤も隷課に勤め、蔵する所の張公方(張遷碑)、衡興祖(衡方碑)の二碑、各おの数百編を臨す。故に

能く程蔡の遺法を深契し、神は古と会う。此の書 両漢の古刻の観を作すべし。」と。郭意城 曰う、「子貞丈は書を以て天下に名し、功を用いること専ら勤にして、舟車にも廃せず、往 臨する所の張遷碑を見るも、尚お枯槎険に架し、怪石 路に当たるの病を免れず。此の易林は疏逸古茂、宜しく程(生歿年不詳)、蔡(132～93)と謦欬を通すべし。予 謂うに貞丈の書は八分 第一、八分は又た此を以て第一と為す。」と。郭、楊の二家の評する所は傾服 至る。息柯は蝯叟の書を学び、行楷は幾ど区別無し、惟だ稍 弱きのみ。書家の論書の重んずるは、筆を得るに在り。筆を得れば則ち篆隷真草 一以て之を貫く、否者んば 何の体を作るに任すも是処 有る無し。此の説甚だ当たる。書の用筆も也(ま)た、路を行くが如く然り。其の運用の法を得て、此に由りて前進せば、誤りて歧途に入るに至らず。筆を得ざる者は、力を致すこと深しと雖も終に門外に在り。蝯叟の書の超越は、固より力を精専に致すに由る。筆の運用　適宜に非ずんば、則ち亦た未だ此に至る能わず。近ころ蝯叟を学ぶ者多きも、徒らに其の屈曲の状を得て、軟きこと骨無きが若し。蓋し筆法を解せず、僅かに形似を求むれば、何れの家の書を習うに任すも均しく一当無し。豈に惟だに蝯叟を学ぶもののみ然らんや。

[注]

1　楊翰：(1812～79)字は伯飛、号は樗盦、別号は息柯居士。道光25年(1845)の進士。

2　鄒湘倜：生歿年不詳。字は資山、新化の人。道光23年(1843)の挙人、湘潭教諭に官す。著に『雅雪園詩鈔』がある。

3　郭崑燾：(1823～82)原名は先梓、字は仲毅。号は意誠、樗叟。湖南湘陰の人。郭嵩燾の弟。

4　郭意城：不詳。

5　枯槎架険怪石当路：書譜273、274行目に見える。なお、書譜には「怪石」を「巨石」に作る。

(陳　俊光)

【No.137】

宝鴨斎蘭叢八十二巻　長沙徐氏本

清徐樹鈞[1]輯。樹鈞。字叔鴻。著宝鴨斎集。因有大令鴨頭丸帖墨迹也。所蔵蘭亭八十六巻。其題跋中屢言之。今失其四。又重者二巻。実八十刻[2]。昔宋理宗蔵蘭亭一百十七巻。其目載輟耕録[3]。游似亦有百種。近代則桂未谷百種[4]。呉平斎二百種[5]。皆衆所同知者。此八十刻。叔鴻得之誰氏不可知。非其所自収輯。与理宗相同者十余本[6]。題跋在前者有宋濂[7]。馬治[8]。清代則程瑶田[9]。江徳量[10]。馮敏昌[11]。捜採既多。自難一一精善。然佳本可得其半。亦云美且富矣。理宗之蔵。以修城本為冠[12]。云出自唐武后時。此亦有之。帖前有薛稷書両行[13]。不知理宗本是否相同。輯此非一蹴可就。費若干日月。幾許心力。方得成是巨観。而一入帖肆。利其分售。以致転瞬零落。若理宗游相及桂呉諸家之蔵。尚有珠聯璧合。如此蘭叢者乎。其散去者。有蘇氏欠石本[14]。李東陽題玉枕本[15]。皆不可以復聚。願得此者。念昔人採集之艱。加之護惜。勿貪拆售之利。而致星散。如理宗之百十七巻。徒存目録已也。

清の徐樹鈞の輯。樹鈞は、字は叔鴻。著の宝鴨斎集は、大令の鴨頭丸帖の墨迹 有るに因るなり。蔵する所の蘭亭八十六巻は、其の題跋中に屢しば之を言う。今　其の四を失い、又た重なるもの二巻なれば、実は八十刻。昔 宋の理宗 蘭亭一百十七巻を蔵す。其の目は輟耕録に載す。游似も亦た百種有り。近代は則ち桂未谷の百種、呉平斎の二百種、皆な衆の同じく知る所の者。此の八十刻、叔鴻 之を誰氏に得るや知るべからざるも、其の自ら収輯する所に非ず。理宗と相同じき者は十余本。題跋の前に在る者に宋濂、馬治有り。清代は則ち程瑶田、江徳量、馮敏昌。捜採既に多ければ、自から一一精善なり難し。然れども佳本 其の半を得べし。亦た美にして且つ富むと云う。理宗の蔵は、修城本を以て冠と為す。唐の武后(690～704)の時より出づと云う。此にも亦た之有り。帖前に薛稷の書両行有り。理宗本は相い同じきを是とするや否を知らず。此を輯むるは一蹴にして就るべき

に非ず。若干の日月、幾許の心力を費やして、方に是の巨観を成すを得るか。而して一たび帖肆に入れば、其の分售を利として、以て転瞬にして零落するを致す。理宗 游相及び桂、呉の諸家の蔵の若きは、尚お珠聯璧合有れども、此の蘭叢なる者に如かんや。其の散去する者に、蘇氏欠石本、李東陽の題玉枕本有り。皆な以て復た聚むべからず。願わくは此を得る者、昔人の採集の艱を念い、之に護惜を加え、拆售の利を貪りて、星散を致す勿かれ。理宗の百十七巻の如きは、徒だ目録を存するのみ。

[注]

1　徐樹鈞：1843～1910。字は叔鴻、室号は宝鴨斎。湖南省長沙の人。黄彭年の『陶楼文鈔』巻9「談瀛雅集図序」に「徐樹鈞、字叔鴻、湖南省長沙人。今官戸部主事。」とある。

2　今失其四、又重者二巻、実八十刻：『叢帖目　4』蘭亭集刻十巻附宝鴨斎蘭叢81巻に「民国二十年。其四刻帰于順徳黄節。其八十二刻帰于銅山張伯英。二十七年九月。張氏所蔵帰于我。去其重複。乃得八十刻。」とある。

3　其目載輟耕録：『輟耕録』巻6の蘭亭集刻。宋 理宗の内府にあった蘭亭117種は十干に配列してある。この為、游似も同様に十干で百種を配列したと伝えられる。

4　桂未谷百種：未谷は桂馥(1736～1805)の号。『寐叟題跋』の「明拓国学本 明刻褚臨本」に「同曹章甓庵所収桂未谷百種。」の記事が見え、『瓶栗斎詩話三編』巻3に「婁県章甓庵士鈔蔵神龍本蘭亭一百二十余種。為桂未谷所手集。」とある。

5　呉平斎二百種：平斎は呉雲(1811～83)の号。『叢帖目　4』に「呉雲所蔵至二百余種。名其斎曰二百蘭亭斎。咸豊四年冬。家遭火災。半為六丁攫去。只存百種。」とある。

6　与理宗相同者十余本：『叢帖目　4』蘭亭集刻10巻附宝鴨斎蘭叢81巻と『輟耕録』巻6に掲げる目録にて比較が可能であるが、照合には不明確な要素もある。

7　宋濂：1310～81。字は景濂、号は潜渓。謚は文憲。浙江省浦江の人。著に『宋学士全集』などがある。

8　馬治：明人。生歿年未詳。字は孝常、元素。室号は佩韋斎。江蘇省宜興の人。書は行書と晋唐の小楷にすぐれた。

9　程瑶田：1725～1814。字は易田、号は伯易。安徽省歙県の人。乾隆35年(1770)の挙人。蔵書家で篆刻にもすぐれた。

10　江徳量：1752～93。字は成嘉、号は秋水、曼殊。江蘇省儀徴の人。乾隆45年(1780)の探花。金石の収蔵に富んだ。

11　馮敏昌：1747～1806。字は伯求、号は魚山。広東省欽県の人。乾隆43年(1778)の進士。金石の収蔵に富み、『孟県金石志』の著がある。

12　以修城本為冠：『輟耕録』巻6の甲集一十二刻の一に見える。

13　帖前有薛稷書両行：故宮博物院『蘭亭図典』(2011)の修城本巻頭に「羲宝過盈尺。参神明以長至。順日月以曜物。得騏驥。」の刻がある。

14　蘇氏欠石本：不詳。

15　李東陽題玉枕本：『懐麓堂集』未収。

(西原　歩)

【No.138】

史克弘[1]神道碑一巻　涿郡史氏本

明彭年[2]書。嘉靖辛酉勒石。年字孔嘉。自題云。右碑文已樹之墓上矣。冢嗣知松江府鶴皐先生直臣[3]。復命年作小

楷。鐫石嵌諸先廟之壁。以便子孫誦覧。広孝思云。克弘名道。官太子少保兵部尚書。碑文李本[4]所撰。鳳陽徐延徳[5]書。直臣復属孔嘉以小楷別書一本。其体仿麻姑壇記。有横直格。八十三行。行二十五字。鐫者沈恒[6]也。明自文氏父子。以小楷擅名呉下。一時学者多工此体。孔嘉亦其最表表者。於時鐫石之技亦精。如章藻[7]。温厚[8]。呉鼐[9]。沈恒。皆世伝刀筆。邢子愿[10]薦沈恒之孫[11]。称其為人端謹。呉中翰墨世家。其祖沈老人恒。与衡山父子周旋。而呉鼐之孫。[12]亦曽為子愿刻来禽館帖[13]。明代書家之盛。無如東呉。即鐫刻亦非他方可望。此碑逾二千言。字径不及五分。鉤摹爽朗。能伝筆勢。庸手所弗能弁。今徐延徳大書深刻之本。世無伝者。孔嘉楷書。得者莫不珍重。与文徴仲之呉白楼墓誌小伝。[14]同其声価。明代精搨。殊不多有。即此装冊。已三百余年物矣。

明の彭年の書、嘉靖辛酉(1561)の勘石。年は字は孔嘉。自ら題して云う、「右の碑文 已に之を墓上に樹つ。冢嗣は知松江府の鶴皐先生直臣、復た年に小楷を作ることを命じ、鐫石し諸を先廟の壁に嵌め、以て子孫の誦覧に便ならしめ、孝思を広めしむ。」と。克弘は名は道、太子少保 兵部尚書に官す。碑文は李本の撰する所、鳳陽の徐延徳の書。直臣復た孔嘉に小楷を以て別に一本を書せんことを属す。其の体は麻姑壇記に仿う。横直の格有り、八十三行、行ごとに二十五字。鐫者は沈恒なり。明は文氏父子(文徴明 1470～1559、文彭 1497～1573)小楷を以て名を呉下に擅にしてより、一時 学ぶ者 多く此の体を工にす。孔嘉も亦た其の最も表表たる者なり。時に於て鐫石の技も亦た精しく、章藻、温厚、呉鼐、沈恒の如きは、皆な世よ刀筆を伝う。邢子愿は沈恒の孫を薦め、其の人となりの端謹なるを称す。呉中の翰墨の世家にして、其の祖の沈老人恒は衡山父子と周旋す。而して呉鼐の孫も亦た曽て子愿の為に来禽館帖を刻す。明代の書家の盛んなること東呉に如くは無し。即ち鐫刻も亦た他方の望むべきに非ず。此の碑は二千言を逾え、字径は五分に及ばざるも、鉤摹は爽朗にして、能く筆勢を伝う。庸手の能く弁ぜざる所なり。今 徐延徳の大書深刻の本 世に伝うる者無く、孔嘉の楷書は得る者 珍重せざるは無く、文徴仲の呉白楼墓誌小伝と其の声価を同じくす。明代の精搨 殊に多くは有らず。即ち此の装冊 已に三百余年の物なり。

[注]

1　史克弘：史道(1485～1554)。克弘は字。号は鹿野、涿州の人。正徳12年(1517)の進士で、官は兵部尚書に至った。

2　彭年：1505～66。字は孔嘉、号は隆池山樵ほか。長洲の人。文徴明らと交わり、詞詩によって「長者」と称された。

3　知松江府鶴皐先生直臣：史直臣、史克弘の長男。字は子忠、嘉靖26年(1547)の進士、36年(1557)松江知府に官した。

4　李本：未詳。

5　徐延徳：？～1567。定国公７世の徐光祚の長男。徐光祚が亡くなり、定国公８世となる。

6　沈恒：生歿年不詳。『石刻刻工研究』に、その刻にかかる２件を載せる。長洲の人。

7　章藻：生歿年不詳。章簡甫(1491～1572)の息子。字は仲玉、長洲の人。『墨池堂選帖』を刻す。

8　温厚：生歿年不詳。『石刻刻工研究』に、その刻にかかる６件を載せる。長洲の人。

9　呉鼐：生歿年不詳。字は周生、長洲の人。『石刻刻工研究』に、その刻にかかる19件を載せる。

10　邢子愿：邢侗(1551～1612)。子愿はその字。山東臨邑の人。万暦甲戌(1574)の進士、官は太僕寺少卿に至った。撰集に名帖『来禽館法帖』３巻がある。

11　沈恒之孫：未詳。

12　呉鼐之孫：呉士端(生歿年不詳)。『石刻刻工研究』未収。『法帖提要』№２双松館帖１巻に「鼐の子の応祈。孫の士端」とある。

13　来禽館帖：集帖。３巻。邢侗の撰集。呉応祈、呉士端の摹勒。万暦27年(1600)の刻。

14　呉白楼墓誌小伝：文徴明の書。『石刻刻工研究』に、呉鼐の刻にかかる「宮保白楼先生呉公伝」「太子少保南京吏部尚書贈太子太保謚文端呉公墓誌銘」を載せる。呉白楼は呉一鵬(1460～1542)。字は南夫、白楼は号。長洲の人。

（鄭　緯）

【№139】

循吏況公像賛一巻　蘇州本

明況鍾[1]像。清道光時刻[2]。孫星衍[3]篆書其額。題詠者。潘奕雋[4]。董国琛[5]。顧震[6]。顧時雷。張景江[7]。陳鴻慶[8]。戴延祄[9]。呉雲[10]。孫星衍。王芑孫[11]。張問陶[12]。陳鴻寿。韓是升[13]。黄丕烈[14]。石韞玉[15]。郭麐[16]。史炳[17]。陳文述[18]。鈕樹玉[19]。陳裴之[20]。王嘉禄[21]。徐元潤[22]。呉信中[23]。徐鳳采[24]。一時呉中聞人及宦於呉者略備。況氏守蘇。有青天之称[25]。歴数百年。猶重其遺像。題識累累。称道弗衰。其時何人徴集。未曽叙明。惟戴詩有雲孫蔵什襲[26]鈕賛有賢裔不絶[27]語。蓋況公後裔。道光時有宦於呉者[28]。属孔継垚[29]依長洲顧氏[30]景賢閣本[31]重摹此像。徴題於諸文士。潘奕雋印曰年開八秩[32]。晩年之筆。肥重而少気力。董国琛書。体貌甚怪。而筆法不古。鈕樹玉小楷為全冊冠。匪石不以書名。若張船山。陳曼生。郭頻伽之曄曄者。似未能過。学人之書。自能遠俗。黄丕烈書。亦甚雅饒。有書巻味也。余皆平正可観。惜王惕甫僅題観款耳。

明の況鍾の像。清の道光の時の刻。孫星衍 篆もて其の額に書す。題詠する者は潘奕雋、董国琛、顧震、顧時雷、張景江、陳鴻慶、戴延祄、呉雲、孫星衍、王芑孫、張問陶、陳鴻寿(1768～1822)、韓是升、黄丕烈、石韞玉、郭麐、史炳、陳文述、鈕樹玉、陳裴之、王嘉禄、徐元潤、呉信中、徐鳳采。一時の呉中の聞人及び呉に宦する者 略ぼ備わる。況氏 蘇に守たりて、青天の称 有り。数百年を歴て猶お其の遺像を重んず。題識 累累として、称道して衰えず。其の時 何人 徴集するや未だ曽て叙明せず。惟だ戴(延祄)の詩に「雲孫 蔵すること什襲」有り。鈕(樹玉)の賛に「賢裔 絶えず」の語有り。蓋し況公の後裔 道光の時 呉に宦する者有り。孔継垚に属して長洲(蘇州)の顧氏景賢閣本に依りて此の像を重摹せしむ。題を諸文士に徴す。潘奕雋の印に「年 八秩を開く」と曰う。晩年の筆なれば、肥重にして気力少なし。董国琛の書は体貌 甚だ怪にして、筆法 古ならず。鈕樹玉の小楷は全冊の冠と為す。匪石(鈕樹玉)は書を以て名せられず。張船山、陳曼生、郭頻伽の曄曄たる者の若きは、未だ過ぐる能わざるに似る。学人の書は、自ら能く俗を遠ざく。黄丕烈の書も亦た甚だ雅饒、書巻の味 有るなり。余は皆な平正にして観るべし。惜しむらくは王惕甫 僅かに観款を題するのみ。

［注］

1　況鍾：1383～1442。字は伯律、号は竜崗、如愚。江西省靖安の人。江蘇省蘇州の知府。『況太守集』がある。

2　清道光時刻：道光６年(1826)蘇州市西美巷に況鍾祠が建設され、そこに建てられた像か。それは『呉郡五百名賢図伝賛』の１つか。もしくは『呉郡五百名賢図伝賛』を参考に刻されたものか。(廖志豪「況鍾像碑研究」『東南文化』1988年第３、４期を参照)

3　孫星衍：1753～1818。字は伯淵、号は淵如。江蘇省武進の人。

4　潘奕雋：1740～1830。字は守愚。号は榕皋。江蘇省呉県の人。著に『三松堂集』がある。

5　董国琛：1777～？。字は琢卿。江蘇省呉県の人。

6　顧震：生歿年未詳。字は大震、号は濺雷。江蘇省南通の人。

7　顧時雷、張景江：『清代人物生卒年表』『清代伝記叢刊』『清代地方人物伝記叢刊』等に見えない。

8　陳鴻慶：生歿年未詳。字は謙谷。浙江省杭州の人。銭杜(1764～1845又は1763～1844)より画法を得る。

9　戴延祁：生歿年未詳。字は受懋、号は竹友。江蘇省蘇州の人。『銀藤花館詞』がある。

10　呉雲：1811～83。字は少甫、号は平斎、退楼。浙江省湖州の人。金石、古印、古書籍の収蔵に富んだ。

11　王芑孫：1755～1817。字は念豊、号は惕甫、楞伽山人ほか。江蘇省蘇州の人。

12　張問陶：1764～1814。字は仲冶、号は船山ほか多い。四川省遂寧の人。乾隆53年(1788)の進士。

13　韓是升：1735～1816。字は東生、号は旭亭、楽餘。江蘇省呉県の人。

14　黄丕烈：1763～1825。字は紹武、号は蕘圃、紹圃。江蘇省蘇州の人。著名な蔵書家。

15　石韞玉：1756～1837。字は執如、号は琢堂ほか。江蘇省蘇州の人。隷書に優れ、また篆刻に長じた。

16　郭麐：1767～1831。字は祥伯、号は頻迦、白眉生ほか多い。江蘇省呉江の人。詩文、書画、刻印ともによくした。

17　史炳：1762～？。字は恒斎。江蘇省溧陽の人。

18　陳文述：1771～1823。字は雲伯、退庵。浙江省杭州の人。陳鴻慶の兄。

19　鈕樹玉：1760～1828。字は藍田、号は匪石。江蘇省蘇州の人。官界を志望せず、在野で文学と訓詁学に精励した。書は篆、隷、行、楷書をよくし、また篆刻にも長じた。

20　陳裴之：1794～1826。字は孟楷、号は小雲、朗玉。浙江省杭州の人。父は陳文述。

21　王嘉禄：1797～1824。字は綏之、号は井叔。江蘇省蘇州の人。

22　徐元潤：1787～1848。字は雲伯、号は秋士。江蘇省太倉の人。

23　呉信中：1766～1821。字は閲甫。江蘇省呉県の人。『玉樹楼稿』がある。

24　徐鳳采：『清代人物生卒年表』『清代伝記叢刊』『清代地方人物伝記叢刊』等に見えない。

25　況氏守蘇有青天之称：『元明事類鈔』巻11に「明劉昌集、況鍾治蘇、剛果敏達有恵政。九載満去、民赴闕留者八万余人。歌曰、況青天、朝命宣、宜早還。又曰、況太守、民父母、願復来、養田叟。」とある。

26　戴詩有雲孫蔵什襲：『銀藤花館詞』未収。

27　鈕賛有賢裔不絶：未詳。

28　道光時有宦於呉者：『蘇州府志』「学校」「職官」に見えない。

29　孔継垚：生歿年未詳。字は硯香、号は蓮郷。江蘇省崑山の人。山水、花鳥画は神に入る。また、人物画にも精通し『呉郡五百名賢図伝賛』の図像を描いた。

30　顧氏：顧沅(1799～1851)。字は湖舟、号は滄浪漁父。江蘇省蘇州の人。『呉郡五百名賢図伝賛』を編集。

31　景賢閣本：未詳。

32　年開八秩：『中国書画家印鑑款識』に見えない。

(浅野泰之)

【No.140】

三公祠碑記[1]二巻　江陰本

清趙錫栄[2]書。道光八年刻石。記文一巻。附祀紳民姓名一巻。文為朱方増[3]撰。三公者。明江陰県典史忠烈閻公[4]。烈愍陳公[5]。訓導節愍馮公[6]。順治乙酉。清兵至江南。三公以孤城抗拒。城破不屈死。紳民従死者甚衆。道光六年。蘇撫陶澍[7]。以士民之請。上其姓名於朝。得旨均準附祀忠義祠中。学使朱方増為文記之。僅言附祀年月。於三公予謚建祠之年月。則未之及。似不免於漏略。其三公別有碑記[8]耶。三公於城陥時全家授命。視死如帰。其忠義奮発。豈復計及没世後有褒顕之者。江陰一県紳民。死事者達十余万[9]。今姓名可考者止数百人。其正気足塞天地。歴数百年。聞者為之感動。雖事久而弥彰。独此文稍簡略。趙錫栄書亦甚平平。於時在事諸人。何不求一善書者繕写勒石。俾得者宝愛其書。諸賢義烈。因之益著。豈不更善。記言諸人殉義。在順治乙酉。請準附祀。在道光乙酉。其年歳相値之巧。非事有運数乎。

清の趙錫栄の書、道光八年(1828)の刻石。記文一巻、附祀紳民姓名一巻、文は朱方増の撰と為す。三公は、明の江陰県典史忠烈 閻公、烈愍 陳公、訓導節愍 馮公なり。順治乙酉(2年1645)、清兵 江南に至る。三公は孤城を以て抗拒し、城破るるも死に屈せず。紳民 従い死する者甚だ衆し。道光六年(1826)、蘇撫の陶澍 士民の請を以て、其の姓名を朝に上り、旨を得て均準(ひと)しく忠義祠の中に附祀し、学使の朱方増 文を為りて之を記すも、僅かに附祀の年月を言うのみにして、三公の予謚建祠の年月に於ては、則ち未だ之に及ばず、漏略を免れざるに似る。其の三公 別に碑記有りや。三公 城陥る時に於て全家 命を授かり、死を視ること帰するが如く、其の忠義奮発す。豈に復た没世の後に及んで之を褒顕する者有るを計らんや。江陰一県の紳民、事に死する者 十余万に達す、今 姓名の考うべき者は止だ数百人のみ。其の正気は天地を塞ぐに足る。数百年を歴て、聞く者 之が為に感動し、事久しと雖ども弥いよ彰かなり。独り此の文は稍や簡略にして、趙錫栄の書も亦た甚だ平平たり。時に於て事に在る諸人、何ぞ一善書者を求め繕写勒石せしめざる。得る者をして其の書を宝愛せしめば、諸賢義烈は之に因りて益ます著わる。豈に更に善からずや。記に諸人の殉義は、順治乙酉(2年1645)に在り、準を請いて附祀するは、道光乙酉(5年1825)に在りと言う。其の年歳 相い値うの巧みは、事の運数有るに非ずや。

[注]

1 三公祠碑記：全名は「三公祠附祀殉義紳民記」(朱方増『求聞過斎文集』巻3)。

2 趙錫栄：未詳。

3 朱方増：？～1830。字は虹舫、浙江省海塩の人。嘉慶6年(1801)の進士で、翰林院編修を授かる。

4 忠烈閻公：閻応元(？～1645)。字は麗亨。北京通州の人。崇禎17年(1644)江陰典史に任ぜられ、翌年8月21日に戦死した。

5 烈愍陳公：陳明遇(？～1645)。浙江省上虞の人。崇禎17年(1644)江陰典史に任ぜられ、翌年8月21日に戦死した。

6 訓導節愍馮公：馮厚敦(？～1645)。字は培郷。金壇の人。崇禎17年(1644)江陰訓導に任ぜられ、翌年8月21日に自縊して節に殉じた。

7 陶樹：1779～1839。字は子霖、子雲。号は雲汀、髯樵。謚は文毅。湖南省安化の人。嘉慶7年(1802)の進士で、翰林院編修を授かり、道光5年(1825)江蘇巡撫に任ぜられる。『印心石屋詩抄』『蜀輶日記』『陶文毅公全集』を著わす。

8 其三公別有碑記：湯金釗に「三公祠記」、汪坤厚に「重建三公祠碑記」、蔡樹に「閻陳二公祠記」、江蘇学政白鎔に「戚烈愍公祠記」がある。

9 江陰一県紳民死事者達十余万：清初の韓菼の『江陰城守紀』に「城中所存無幾、躱在寺観塔上隠僻処及僧印白等、共計大小五十三人。是役也、守城八十一日、城内死者九万七千余人。城外死者七万五千余人。」とある。また許重熙の『江陰城守後紀』、趙曦明の『江上孤忠録』、高観瀾の『江陰忠義恩旌録』、他『清世祖実録』『江陰県志』『清史稿』にも同類の記載がある。

(賈 川)

【No.141】

承天寺十奇詩[1]一巻 泉州本

清張瑞図書。款云天啓丙寅書於湛初上人[2]之無垢軒中。詩為宋王梅渓[3]所作。十奇者。榕陰逕午陰。塔無栖禽。偃松清風。瑶台夜月。捲簾朝日。推篷夜雨。方池梅影。嘯菴竹声。鸚山暮雲。石如鸚鵡也。梅渓各賦七律一篇。二水作小行書。並和瑶台明月一首。又喬遠[4]和塔無栖禽一首。則喬遠自書。二水於明清之際。書書頗重。与王覚斯相頡頏。学懐素千文。甚有骨力。有如孫過庭所謂枯槎架険巨石当路者。所少含蓄之韻。此本与董香光自書詩同

装。王煙客[5]所蔵真迹。刻者不知為誰。後有呉立群跋[6]。称賛二水書之佳。在董香光以上。謂香光遜其魄力。董書不矜奇尚異。晩年気韻沖淡。超然絶俗。張則横使気力。無静穆之意。書品高下懸殊。二人趨向。本不相同。無庸相提並論。呉某非知書者。亦莫詳為何許人。俗士妄言。無足軽重。其云二水勁健。香光軟弱。以是判其優劣。真児童之見也。

清(明の誤記か)の張瑞図(1570～1641)の書。款に云う「天啓丙寅(6年 1626)湛初上人の無垢軒中に書す」と。詩は宋の王梅渓の作る所と為す。十奇は、「榕陰逕午陰」「塔無栖禽」「偃松清風」「瑶台夜月」「捲簾朝日」「推篷夜雨」「方池梅影」「嘯菴竹声」「鸚山暮雲」「石如鸚鵡」なり。梅渓は各おの七律一篇を賦し、二水(張瑞図)は小行書を作り、並びに「瑶台明月」に和するの一首あり。又た喬遠の「塔無栖禽」に和するの一首は、則ち喬遠の自書。二水は明清の際に於て、書書(書画の誤記か)が頗る重ぜられ、王覚斯(鐸 1592～1652)と相い頡頏す。懐素の千文を学び、甚だ骨力有り。孫過庭(「書譜」273、274行目)の所謂 枯槎の険に架し、巨石の路に当たるが如き者有り。少く所は含蓄の韻。此の本 董香光(其昌 1555～1636)の自書詩と同に装せらる。王煙客 蔵する所の真迹。刻者は誰と為すかを知らず。後に呉立群の跋有り、二水の書の佳なるは、董香光 以上に在りと称賛す。謂えらく香光は其の魄力に遜るも、董書は奇を矜り異を尚ばず。晩年は気韻沖淡、超然として俗を絶つ。張は則ち横に気力を使い、静穆の意無し。書品の高下は懸殊なりと。二人の趨向は本より相い同じからず。相提し並び論ずるを庸いる無かれ。呉某は書を知る者に非ず。亦た何許の人為るやを詳しくする莫し。俗士の妄言は、軽重するに足る無し。其れ二水は勁健、香光は軟弱と云いて、是を以て其の優劣を判けるは、真に児童の見なり。

[注]

1　承天寺十奇詩：原石は泉州市博物館の蔵。なお、1998年梅渓集重刊委員会編『王十朋全集』では、「榕陰逕午陰」「瑶台夜月」を「榕逕午陰」「瑶台明月」に作る。

2　湛初上人：未詳

3　王梅渓：王十朋(1112～71)。字は亀齢、諡は忠文。楽清(浙江省)の人。南宋の紹興7年(1137)の状元。官は龍図閣学士に至った。『王状元集注分類東坡先生詩集』は王十朋に仮託したもの。

4　喬遠：何喬遠。字は穉孝、晋江の人。万暦14年(1586)の進士。

5　王煙客：王時敏(1592～1680)。字は遜之。江南太倉(江蘇省)の人。祖父に明の大学士 王錫爵をもち、名家の出身。明末清初の正統派の文人画家。董其昌に文学や書画の理論を学んだ。

6　呉立群跋：未詳

(湯淺圭祐)

【No.142】

王文粛奏稿一巻　太倉王氏本

明王錫爵[1]書。清光緒十八年。文粛之九世孫恂[2]勒石。題云先文粛輔明神宗。前後十載。及再起。上已倦勤。尤悪廷臣激聒。公遇事納忠。不敢露章。避上所忌也。往往先将順而後規戒。故十申六七。先宮保詹菴相国。康熙時刊公遺疏。論儲事者六[3]。此掲其一。三百年来手沢如新。謹泐諸石。備後之脩明史者採焉。翁同和題云[4]。此疏稿当是万暦二十一年五六月間事[5]。所謂連章請速決者[6]。辞意隠閔。権而不失其正。嗚呼以剛直之姿。遇庸闇之主。又当盈廷交閧之日。而一身任回斡之機。不綦難哉。公之九世孫恂奉以来京。因得敬観而識其後。文粛書迹[7]。明人叢刻中不多見。此手稿筆法秀勁[8]。純任自然。翁跋仿顔書。亦復厚重。恂之小楷。清潤無俗気。後有徐致祥[9]。戚揚[10]。龐鴻文[11]。鴻書[12]。陸潤庠[13]。廖寿恒[14]。翁曽桂[15]。呉元炳[16]。張預[17]。僅留観款。鐫者長沙陳元玉[18]。光緒間名刻手也。

明の王錫爵の書。清の光緒十八年(1892)、文粛九世の孫の恂の勒石。題に云う「先 文粛 明の神宗(万暦帝 1572～1620)を輔くること、前後十載。再起するに及んで、上は已に倦勤し、尤も廷臣の激聒するを悪む。公 事に遇いて忠を納め、敢えて露章せず、上の忌む所を避くるなり。往往にして将順を先にして規戒を後にす。故に十の六七を申す。先 宮保 詹菴相国、康熙の時 公の遺疏を刊す。儲事を論ずる者は六、此に其の一を掲ぐ。三百年来の手沢 新なるが如く、謹しんで諸を石に泐し、後の明史を脩むる者の焉を採るに備う。」と。翁同和(1830～1904) 題して云う「此の疏稿は当に是れ万暦二十一年(1593) 五・六月の間の事なるべし。所謂 章を連ね速決するを請う者なり。辞意 隠関し、権りて其の正を失わず。嗚呼 剛直の姿を以て、庸闇の主に遇い、又た盈廷 交閧するの日に当りて、一身 回斡の機を任う。難きを綦めずや。公の九世の孫の恂 奉じて以て京に来たる。因りて敬観するを得て其の後に識す。」と。文粛の書迹は、明人の叢刻の中に多くは見えず。此の手稿は筆法は秀勁、純ら自然に任す。翁跋は顔書に仿い、亦た復た厚重。恂の小楷は、清潤にして俗気無し。後に徐致祥、戚揚、龐鴻文、鴻書、陸潤庠、廖寿恒、翁曽桂、呉元炳、張預の僅かに観款を留むる有り。鐫者は長沙の陳元玉。光緒間の名刻手なり。

[注]

1　王錫爵：1534～1610。字は元馭、号は荊石。文粛は謚。江蘇省太倉の人。嘉靖41(1562)年の進士。『淳化閣帖』王文粛本がある。

2　恂：未詳。

3　先宮保詹菴相国。康熙時刊公遺疏。論儲事者六：未詳。

4　翁同和題云：『瓶廬文鈔』『翁文恭公日記』未収。

5　万暦二十一年五六月間事：『王文粛公全集』の「文粛王公奏草」巻11～12には、万暦21年５・６月間の奏疏が計14件ある。５月 奏報東事疏(７日)、請調養聖躬疏・定国論一政体疏(８日)、請定進講経書疏(14日)、催発緊要章奏疏(日付不明)、恭候起居疏(22日)、答問東事疏(23日)、弁論科臣遷転事疏(28日)、謝宣論疏(29日)、６月 催発章奏疏(３日)、謝釈宥繫臣疏(７日)、請発銓部乞休原奏疏(14日)、請処分部臣疏(20日)、答廟享遣代疏(29日)。そのうち、定国論一政体疏、請定進講経書疏、恭候起居疏、答問東事疏、催発章奏疏、請発銓部乞休原奏疏はそれぞれ『神宗実録』巻260万暦21年５月 辛酉、丁卯、乙亥、丙子、巻261 ６月 丙戌、丁酉に見えるが、文章に若干の異同がある。

6　連章請速決者：『明史』列伝第106王錫爵(万暦21年)に「是年春挙冊立大典。……錫爵旋請速決、且曰、曩元子初生、業為頒詔肆赦。詔書称祗承宗社、明以皇太子待之矣。今復何疑而弗決哉。不報。七月……」とある。

7　文粛書迹：王世貞『弇州山人続稿』巻157「道経書後」王学士書黄庭経に「元馭学士書法、在虞褚間。而過自肯与墨池盟。……黄庭内景経、神采風調、翩翩出蹊径外。」とある。また、邢侗『来禽館集』巻21題王相公書に「太原相公書、繇聖教孫虔礼出。大是書家。」とあるほか、董其昌『容台別集』の「題跋」天全楼帖に「蓋文粛深於書。書尤深於唐碑。晩年猶懸碑刻蒲四壁。特不欲以書名耳。」とある。

8　筆法秀勁：婁堅『学古緒言』に「王文粛公書、小楷清整秀勁。大可径寸者、尤骨重脈和、特為合作。」とある。

9　徐致祥：1838～99。字は季和。江蘇省嘉定の人。咸豊10年(1860)の進士。

10　戚揚：1857～1945。字は昇淮。光緒15年(1889)の進士。

11　龐鴻文：1845～1909。字は伯綱。号は絅堂。江蘇省常熟の人。光緒２年(1876)の進士。

12　鴻書：龐鴻書(生歿年不詳)。字は仲畝、号は渠庵、酈亭。江蘇省常熟の人。光緒６年(1880)の進士。龐鍾璐の子で、龐鴻文の弟。

13　陸潤庠：1841～1915。字は鳳石。号は雲洒、固叟。江蘇省蘇州の人。

14　廖寿恒：1839～1903。字は仲山。号は抑斎。江蘇省嘉定の人。

15　翁曽桂：1837～1905。字は篠珊。江蘇省常熟の人。

16　呉元炳：？～1886。河南省固始の人。咸豊10年(1860)の進士。

17　張預：生歿年不詳。字は子虞、号は腹廬、量月楼、崇蘭堂、虞庵。浙江省杭州の人。

18　陳元玉：『石刻刻工研究』未収。

（池田絵理香）

【No.143】

翰林賜宴詩一巻[1]翰林院本

清張照[2]書。乾隆九年十月。重葺翰林院落成。車駕臨幸錫宴。送大学士掌院事鄂爾泰[3]。張廷玉[4]進署。以張説東壁図書府[5]五律字為韻賦詩。御製二律。得東字音字[6]。飭諸臣各分一韻[7]。鄂爾泰。張廷玉。福敏[8]。陳世倌[9]。史貽直[10]。任蘭枝[11]。彭維新[12]。張照。汪由敦。劉統勲。阿克敦[13]。彭樹葵[14]。陳徳華[15]。銭陳群[16]。徳齢[17]。昌熾[18]。塞爾赫[19]。徳新[20]。秦蕙田[21]。励宗万[22]。敷文[23]。張若靄[24]。嵩寿[25]。張鵬翀。劉綸[26]。嵇璜。裘曰脩。世臣[27]。于振[28]。陳邦彦。涂逢震[29]。崔紀[30]。双慶[31]。観保[32]。于敏中。董邦達。宋楠[33]。首尾二詩為御製。余以韻字為先後。張照以小行書書之[34]。毎頁十行。行十一二字不等。辺格寛窄両層。御製詩之四周。皆作花辺。其書雖行体。而行次甚工整。似不免有拘謹処。比得天他作少遜。蓋応制之書。意有矜持。非若尋常游行自在也。鐫刻精美。石已不知存否。乾隆旧搨。墨黝如漆者。不恒有矣。

清の張照の書。乾隆九年(1744)十月、翰林院を重葺して落成す。車駕臨幸し宴を錫う。大学士掌院事の鄂爾泰、張廷玉を送り署に進めしめ、張説の東壁図書府の五律の字を以て韻と為し詩を賦せしむ。御製は二律、東の字音の字を得、諸臣に飭して各おの一韻を分かたしむ。鄂爾泰、張廷玉、福敏、陳世倌、史貽直、任蘭枝、彭維新、張照、汪由敦、劉統勲、阿克敦、彭樹葵、陳徳華、銭陳群、徳齢、昌熾、塞爾赫、徳新、秦蕙田、励宗万、敷文、張若靄、嵩寿、張鵬翀、劉綸、嵇璜、裘曰脩、世臣、于振、陳邦彦、涂逢震、崔紀、双慶、観保、于敏中、董邦達、宋楠。首尾の二詩は御製為り、余は韻字を以て先後を為す。張照　小行書を以て之を書す。毎頁十行、行ごとに十一、二字 等しからず。辺格は寛窄 両層。御製詩の四周は、皆な花辺を作る。其の書は行体と雖も、而れども行次は甚だ工整にして、拘謹する処有るを免れざるに似る。得天(張照)の他作と比ぶれば少しく遜る。蓋し応制の書は、意に矜持有り、尋常の游行の自在の若きに非ざるなり。鐫刻は精美、石　已に存するや否やを知らず。乾隆の旧搨、墨の黝きこと漆の如き者は、恒には有らざるなり。

［注］

1　翰林賜宴詩一巻：張廷玉『澄懐主人自訂年譜』巻５に「是月南書房先期承旨、重葺翰林院落成、車駕臨幸錫宴、送大学士掌院事鄂爾泰張廷玉進署、以張説東壁図書府五律字為韻、賦東字音字二首。」とみえる。

2　張照：1691～1745。字は得天、号は天瓶、涇南、諡を文敏という。江蘇省松江の人。康熙48年(1709)の進士、累進して刑部尚書に至った。帖学の大家で、その書は内府に数多く収蔵された。専帖に『玉虹楼法帖』『瀛海仙班帖』がある。

3　鄂爾泰：1677～1745。字は毅庵、姓は西林覚羅、諡は文端。康熙38年(1699)の挙人。官は保和殿大学士に至った。

4　張廷玉：1672～1755。字は衡臣、号は研斎、室号は伝経堂、澄懐園。安徽省桐城の人。

5　張説東壁図書府：張説(667～730)の五律「恩勅麗正殿書院賜宴応制得林字」詩。その首聯が「東壁図書府、西園翰墨林」。『漢書』天文志に「東壁二星、主文籍。天下図書之府。」とある。

6　得東字音字：『御製詩文集』巻23、鄂爾泰・張廷玉等『詞林典故』巻1所収。

7　飭諸臣各分一韻：分韻者は38人であるが、この提要は梁詩正1名を欠落する。梁詩正(1697～1763)は字は養仲、号は薌林、浙江省杭州の人。各分韻の字は以下の通り。鄂爾泰は壁字。張廷玉は図字。福敏は書字。陳世倌は府字。史貽直は西字。任蘭枝は園字。彭維新は翰字。張照は墨字。汪由敦は林字。劉統勲は誦字。阿克敦は詩字。梁詩正は聞字。彭樹葵は国字。陳徳華は政字。銭陳群は講字。徳齢は易字。昌熾は見字。塞爾赫は天字。徳新は心字。秦蕙田は位字。励宗万は窃字。敷文は和字。張若靄は羹字。嵩寿は重字。張鵬翀は恩字。劉綸は叨字。嵇璜は酔字。裘曰脩は酒字。世臣は深字。于振は載字。陳邦彦は歌字。涂逢震は春字。崔紀は興字。双慶は曲字。観保は情字。于敏中は竭字。董邦達は為字。宋楠は知字。

8　福敏：1673～1756。字は龍翰、室号は湘隣。満州鑲黄旗の人。

9　陳世倌：1680～1758。字は秉之、号は蓮宇。浙江省海寧の人。

10　史貽直：1682～1763。字は敬弦、号は鉄崖、室号は浮翠亭。江蘇省溧陽の人。

11　任蘭枝：1677～1746。字は香谷、室号は南楼、随斎、見南。江蘇省溧陽の人。

12　彭維新：生歿年未詳。字は石原、号は余山。室号は墨香閣。湖南省茶陵県の人。

13　阿克敦：1685～1756。字は冲和、立恒、号は恒厳。室号は徳蔭堂。満州正白旗の人。

14　彭樹葵：生歿年未詳。字は覲之、号は水南。河南省夏邑県の人。

15　陳徳華：生歿年未詳。字は雲倬、号は月渓。安州の人。

16　銭陳群：1686～1774。字は主敬、号は香樹、集斎。浙江省嘉興の人。康熙60年(1721)の進士、官は刑部侍郎に至った。

17　徳齢：『清人室名別称字号索引』には「徳林 一作齢、姓閻」とある。

18　昌熾：未詳。

19　塞爾赫：生歿年未詳。字は標庵、号は北阡孝子。室号は暁亭。満州の人。

20　徳新：生歿年未詳。僧侶。字は懶牧。江蘇省無錫宋村朱氏の子。

21　秦蕙田：1702～64。字は樹峯、号は味経。江蘇省無錫の人。

22　励宗万：1705～59。字は滋大、号は衣園、竹渓。河北省静海の人。康熙60年(1721)の進士、17歳で翰林院に入った。

23　敷文：励敷文。未詳。

24　張若靄：1713～46。字は景采、景彩、号は晴嵐。室号は蘊真閣。安徽省桐城の人。張廷玉の子。

25　嵩寿：生歿年未詳。字は茂承、号は雲依、姓は赫舎里。満州正黄旗の人。雍正元年(1723)の進士、官は礼部尚書に至った。

26　劉綸：1711～73。字は如叔、号は縄庵、慎涵。江蘇省武進の人。

27　世臣：劉世臣。未詳。

28　于振：生歿年未詳。字は秋田。江蘇省金壇の人。雍正元年(1723)の状元、官は侍読学士に至った。

29　涂逢震：生歿年未詳。字は京伯、号は石渓。江西省南昌の人。

30　崔紀：1693～1750。字は南有、号は虞村。山西省永済の人。

31　双慶：生歿年未詳。字は咸中、号は有亭、西峯。満州鑲白旗の人。

32　観保：生歿年未詳。字は伯容、号は補亭、蘊玉。満州の人。

33　宋楠：生歿年未詳。字は丹林、号は峯山。浙江省建徳の人。

34　張照以小行書書之：『叢帖目　2』孔継涑『瀛海仙班帖』10巻の第4巻に「御製重葺翰林院落成五律及鄂爾泰等三十八人和詩」がある。

（西原　歩）